令和二年度

宮崎県文化講座研究紀要

第四十七輯

宮崎県立図書館

序文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度に「宮崎県地方史講座」として開設し、平成十九年度からは地域の歴史のみならず、自然科学などにも範囲を広げた幅広い文化の発信と理解を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

例年、宮崎県の歴史・考古・民俗・人物・地理・地質・災害などに関して研究をされておられる方々の中から講師を招聘し講座を開催しておりますが、令和二年度は、グローバル化といった分野にも内容を広げ、根井三郎を顕彰する会会長　根井　翼氏『根井三郎』について」、宮崎国際大学　国際教養学部長補佐　地域連携センター副長　ウォーカー・ロイド氏「神話の源流で『宮崎』で地球人を」の計二回を実施しました。しかしながら今年度は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大によって、一月に実施予定であった濵田　登氏の「夢の甲子園～人づくり・心づくり・チームづくり」の講座を中止せざるをえませんでした。大変残念なことでした。

講座の内容は、講師の方々に文章にまとめていただき、「宮崎県文化講座研究紀要」（第三十三輯までの名称は「宮崎県地方史研究紀要」）として毎年発行し、宮崎の歴史・文化等に関する調査・研究に資することにも努めております。本年度も、講座を実施されたお二人の文章を掲載いたしました。さらに、昨年度都合により掲載できなかった、オペラ『赤毛のアン』上演実行委員会委員長　見山　靖代氏の文章も掲載しております。

今後とも当館の研究紀要が、「ふるさと宮崎」の歴史や文化の研究の一助となり、県民の皆様の生涯学習の推進に役立つことができれば、大変幸せに存じます。

最後になりましたが、今回刊行される「宮崎県文化講座研究紀要」第四十七輯に御寄稿いただきました三名の先生方、講座開催にあたり御協力をいただきました関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

令和三年三月

目次

一　根井　翼
「政府の指令に異を唱え、ユダヤ人難民の命を救った気骨のある外交官　根井三郎」……1～20

二　ウォーカー・ロイド
「神話の源流『宮崎』で地球人を」……21～36

三　見山　靖代
オペラ『赤毛のアン』の実現に向けて」……37～52

政府の指令に異を唱え、ユダヤ人の難民の命を救った気骨のある外交官　根井三郎

根井三郎を顕彰する会

会長　根井　翼

目次

一　「根井三郎を顕彰する会」について

二　根井三郎が外交官として活動した時代

三　根井三郎とは

1

「根井三郎を顕彰する会」について

◆平成二七年杉原千畝について研究している研究者（古江孝治氏）より，根井三郎について佐土原総合支所に調査依頼。

◆杉原千畝を調査研究している段階で、根井三郎の存在が大きくクローズアップされてきた。

▲根井という名字は、宮崎県宮崎市佐土原町に多くある。

▲根井・根井と言うことで、私にも確認があった。

▲佐土原総合支所の佐土原在住職員を中心に聞き取り調査。

◎根井三郎に関する資料は無く、聞き取り調査を終了する。

●「顕彰の起こり」

◆平成二七年九月福岡アジア美術館において「命のバトンを繋いだ本人達展」が開催される。十二月に、唐沢寿明主演の映画「杉原千畝」が公開され、この映画で初めて根井三郎と根井三郎の苦悩の姿がメディア作品で公開される。

◆十二月報道関係が根井三郎に関する調査開始（宮崎日日新聞）

◆二八年三月佐土原にて親族、及び根井三郎の写真が発見され、報道される。

○平成二八年二月宮崎市佐土原に住む根井三郎親族の家から発見された根井三郎の写真。十九歳～二二歳頃、大正十年から十三年頃の写真ではないか。と思われる。

○百年近く、親族にこの写真がきちんと保管されていた。この写真がなければ、根井三郎の顕彰の開始、広がりは無かったと考える。このことから考えると、

画像：根井三郎を顕彰する会提供

根井三郎の人道的な行いは、全くと言っていいほど、知られていなかったと言うことである。

◆平成二八年度宮崎県郷土先覚者顕彰事業に宮崎市として提案し、採用される。

●「顕彰開始」

◆平成二八年八月四日　宮崎市佐土原町域住民を中心とした顕彰組織の発足「根井三郎を顕彰する会」

◆平成二八年九月二十四日　根井三郎講演会開催（宮崎において初めて根井三郎についての発信）

◆同九月二五日　映画「杉原千畝」の上映会（宮崎映画祭の協力）上映前に、根井三郎についての解説を行い、映画を通じて根井三郎の苦悩と隠された偉業の周知となった。

◆平成二九年から「顕彰する会」の顕彰活動を推進

①平成三十年度以降の根井三郎顕彰の補助事業が計画

②根井三郎の孫（根井成美氏・千葉県市川市在住）の存在が明らかになる。

③元宮崎県警察本部長　野口　泰氏の尽力による早期の資料等収集

④十月根井三郎氏の孫、根井成美氏、ジンベルグ・ヤコブ国士舘大学教授、外交史料館白石課長補佐等と東京で面会。

⑤平成三一年二月二七日～三月二日　資料展開催（一回目）（佐土原総合文化センター）

▲年譜の作成展示、根井三郎に関する使用の展示（将棋盤等）出生地と言われている旧佐土原町福島地区の絵図等々

▲三月二日　顕彰講演会開催　佐土原総合文化センター大ホールが六百名の参加者で満席となり、根井三郎についての関心の高まりを強く感じる。

古江孝治氏　ジンベルグ・ヤコブ教授　根井成美氏

戸敷　正市長　根井　翼が登壇して、シンポジウムとジンベルグ・ヤコブ教授の講演会を開催。

⑥佐土原歴史資料館　通称「鶴松館」において、八月に資料展（二回目）を開催する。

⑦三回目の資料展は、令和二年七月十二日～七月十八日まで宮崎県立図書館で開催。四月に根井三郎が発給したビザが発見できたから開催したというものではなく、広く宮崎市民の皆さんに根井三郎という人物の存在を知って貰おうという趣旨で令和元年から計画。四回目の資料展は、規模を縮小して、八月に宮崎市立図書館で開催。

2

根井三郎が外交官として活動した時代

○一九三九年（昭和十四年）九月一日ドイツ軍がポーランドに侵攻「第二次世界大戦のはじまり」とされている。

○ドイツにおいては、一九三三年（昭和八年）一月ヒトラー内閣成立。一九四五年（昭和二十年）五月八日までナチスドイツの時代

○ナチスドイツは、一つの民族、一つの国家、一人の総統を国の標語としていた。

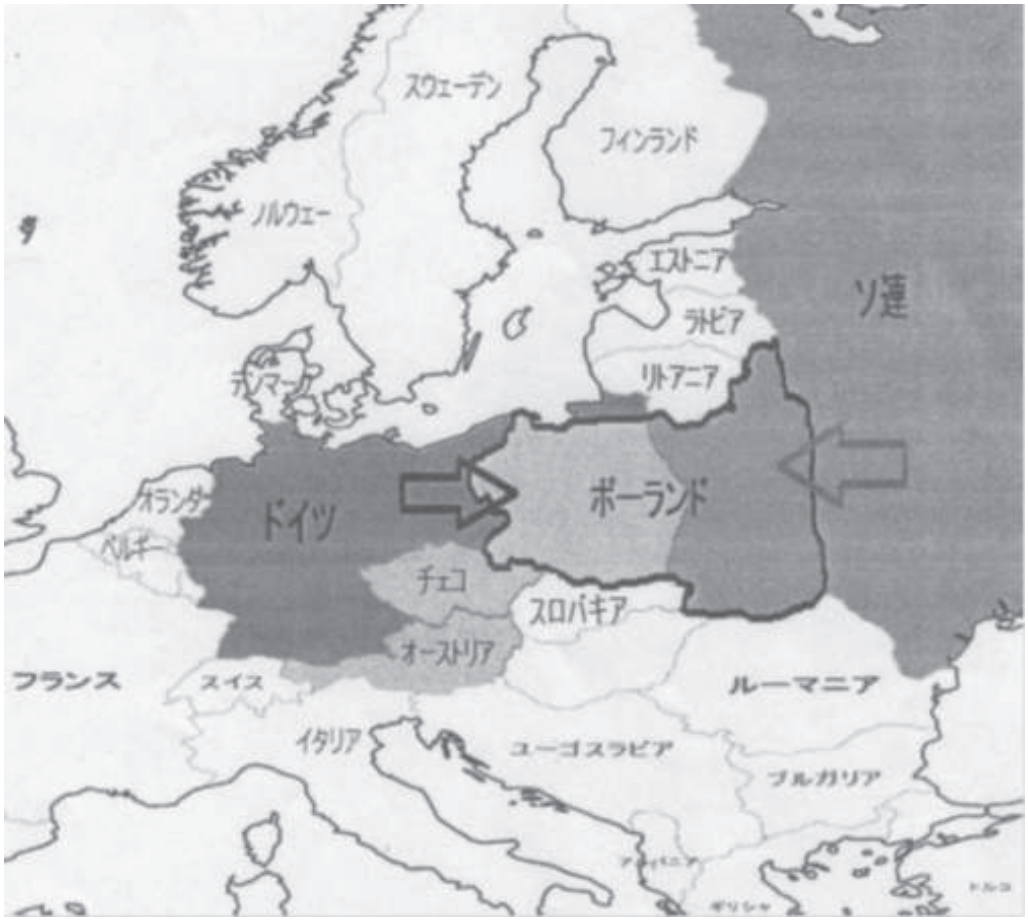
○ナチスドイツにおいては、ユダヤ人は、排斥の対象となっていた。

○ナチスドイツに住んでいたユダヤ人は、国外排斥され、隣国である、ポーランドへ、

○ナチスのポーランド侵攻後は、リトアニアへ

○しかし、そのリトアニアも一九四〇年（昭和十五年）七月には、ソ連に併合され、当時のヨーロッパにおいては、ユダヤ人は逃げる場所も無くなっていた。

○日独伊三国同盟を締結している時代一九四〇年（昭和十五年九月二七日）



地図：根井三郎を顕彰する会より提供

3

「根井三郎」とは。

○「サムライ外交官」「気骨ある外交官」「多くを語らぬ外交官」「自分の実績を誇示しない外交官」

○時の日本政府に対して「面白からず」と返信して、杉原千畝が発給したビザを持っているユダヤ人難民を福井県の敦賀港に渡航させた人物。また、ビザを持っていないユダヤ人難民にウラジオストクで、時の政府の命令に異を唱えて、単独でビザを発給し、福井県敦賀港に渡航させ、ユダヤ人難民の人道的支援をした人物。

●なぜ知られてこなかったのか。

●根井三郎の署名のあるビザはごく僅か。

●更に、根井三郎に対する国からの指令、そしてその指令に異を唱えていた根井三郎。

●ユダヤ人の人たちが知り得ない場所で、根井三郎の苦悩と、人道的な行いがあった。

◆このような根井三郎の人道的な行いは、根井三郎本人が発信しなければ、誰も知り得ないものでした。ユダヤ人難民達にも、自分の名前を告げていない。

したがって、ユダヤ人難民達には、根井三郎の名前が覚えられていない。

そして、根井三郎は、誰にも、家族にもこのことを語らずに一九九二年に亡くなっている。

◆中日新聞社が杉原千畝について世界中を取材し出版した「自由への逃走」（一九九五年出版）の「もう一人いたスギハラ」という章で、杉原千畝の妻幸子さんと根井三郎が偶然出会った時の言葉として「杉原さんがビザを出したというのに、私たちが駄目だという理由はありませんよ」と述べている。

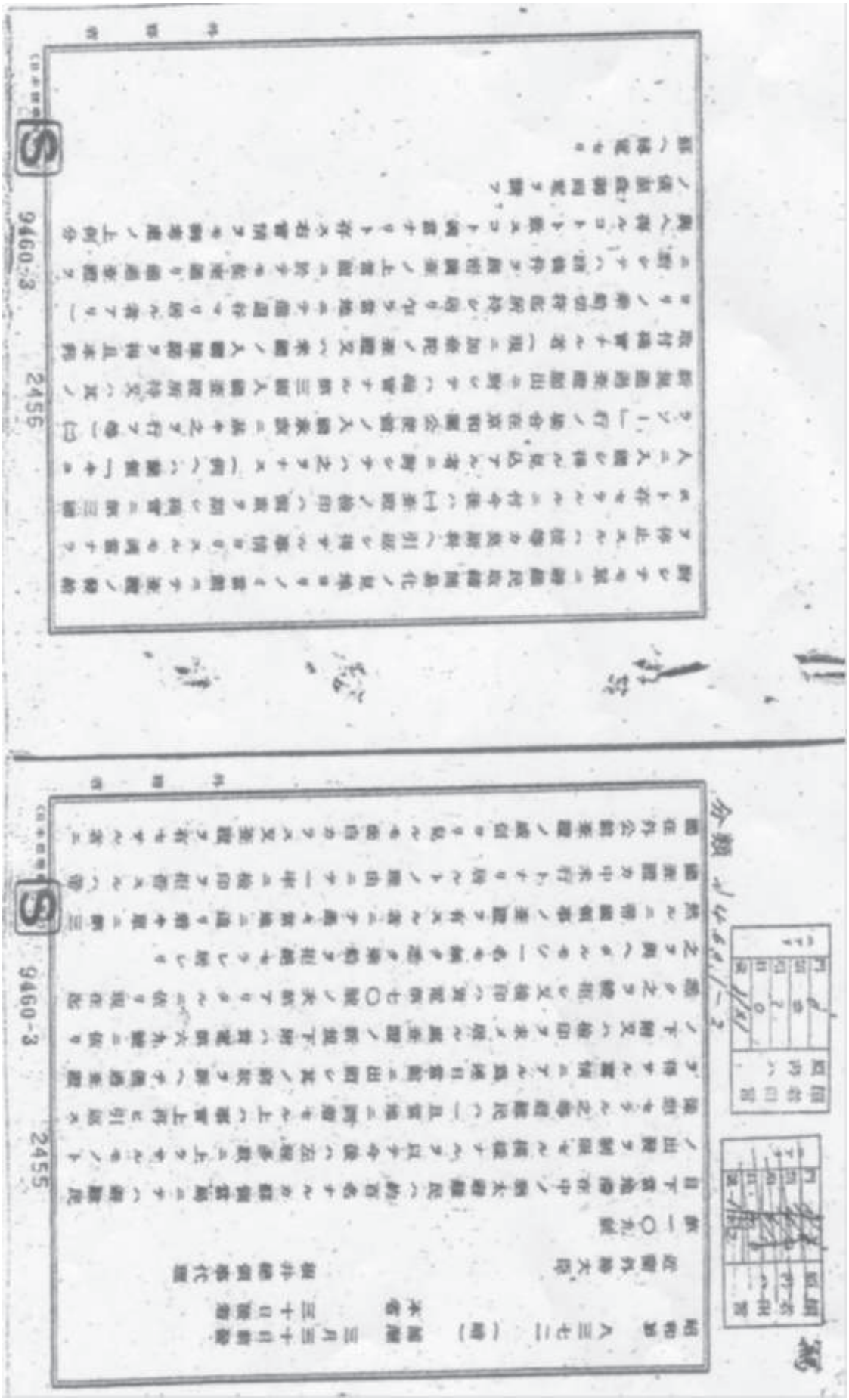
▲これまでの調査の中で、根井三郎がウラジオストクでの対応について、語った記録としては、これだけである。

「根井三郎と国とのやりとりの電報」

◆これは、外務省外交資料館に保管されていた一九四一年三月三〇日に当時のウラジオストク日本領事館総領事代理であった「根井三郎」と「近衛文麿外務大臣代理」（総理大臣）との間で交わされた電報である。

◆この電報の存在は、根井三郎の言葉が載っていた中日新聞発行の書籍「自由への逃走」（一九九五年発行）にも書かれており、二十年以上前からも根井三郎の人道的な行いは知られていたのだ。ということが調査で判明。

◆この電報の前の二月十日に外務大臣代理近衛文麿より、根井三郎宛に「杉原千畝が発給したビザは当てにならない。オランダ政府の許可が必要」といった指令が出され、三月十九日には、「ウラジオストクに集まったユダヤ人難民の持つビザを再検閲し、日本入国を厳しく取り締まるよう、また、再度繰り返すが、杉原ビザは容認できない」という指令が出ている。



資料：（外務省外交史料館所蔵）根井三郎を顕彰する会提供

※このような、指令を国から受け止めての根井三郎の反論がこの電報である。

◆この電報の重要な部分を要約すると（右ページの下側部分の後ろから三行目から）

「帝国領事の査証を有する者にて、はるばる当地にたどり着き、ただ単に第三国査証が中南米となりおるとの理由で、一律に検印を拒絶するのは、帝国在外公館査証の威信よりみるも、〝面白からず〟また、査証を持たない者に対しても、単に避難難民取り締まり簡易化の見地よりのみ、当館にて査証の発給を停止するは、彼らがモスクワに引き返し得ざるよりするも、適当ならず」

現存しているこの電報と、この反論に至るまでの根井三郎と国のやりとりを整理して解釈すると。

◆根井三郎に対して、国（本省）からの指令

●杉原千畝が発給したビザには不備が多いので、再審査を行え。

●ウラジオストクで、ユダヤ人難民へのビザや渡航証明書の発給は行わないように、対応はモスクワの大使館以外は行うな。（モスクワに引き返して貰え。）

◆根井三郎はこの指令に対して、根井三郎の電報でいっていることは。

●「杉原千畝が発給したビザを持つユダヤ人達が、ようやくウラジオストクにたどり着いた中『ビザは中南米行きとして許可したようだが、実際はそれが確認できない不備ある許可・ビザの発給である。日本行きは認められない』とするのは、一度、日本帝国在外公館として審査、許可したものを、不備・確認漏れがあったので失効だとするようなもの。このような、日本の対応は、日本国の権威を損なうものだ〝面白からず〟（良くない）また、ユダヤ人達避難民がモスクワまで引き返すことは不可能。ウラジオストクでのビザ発給停止は適切ではない」

このように、根井三郎は国（本省）の命令に対して、〝面白からず〟と、強い表現を用いて異議を唱えていた。

●本省指令への根井三郎の反論ともとれるこの電報の宛先

近衛文麿外務大臣であるが、実際の外務大臣は、松岡洋右（ようすけ）。この時期、松岡は日ソ中立条約締結に向けてヨーロッパ外遊中。当時の総理大臣であった近衛文麿が外務大臣を兼務中

●顕彰する会で判明したこと

○この電報を送る前の一九四〇年十二月に、「ユダヤ人難民に対するビザ発給は、モスクワ大使館以外行うな」と、近衛文麿外務大臣から、在ヨーロッパ、ソ連の大使館に通達が出ている。

○外交資料館には、根井三郎がウラジオストク日本総領事館代表者副領事（総領事代理）となり、ウラジオストクへ渡ったことを示す、〝一九四〇年十二月付けの旅券〟が保管されている。

●この電報や、他の外交資料館保管資料より、根井三郎の普通では考えられない〝気骨ある対応ぶり〟が伺える。

しかし、二十年以上も前からこの電報の所在は知られていた。根井三郎の気骨ある対応も知られていた。それでは、〝なぜ〟ここまで根井三郎の名前・その偉業が知られてこなかっ

たのか。

◆根井三郎は、自分の行った行動を家族にも誰にも話していない。孫の根井成美氏も私どもとの接触の中で、祖父である根井三郎氏がすごいことしたのだということを知られた次第である。ただ、外務省の仕事をしていたということは知っておられたようである。

そして、根井三郎は黙して語らぬまま、一九九二年東京都でなくなっています。

このことにより、根井三郎については、杉原千畝顕彰の影に隠れてしまう形になり、近年まで知られてこなかった。これまでの、顕彰活動を通して、このように考えている。

根井三郎が近衛文麿総理大臣に宛てた電報〝面白からず〟戦時中の極限的な場面において、国に反論する決断に至るまでの困難、苦悩を考えると「もう一人のスギハラ」として、根井三郎の行いを影に置いたままには出来ない。もっと、根井三郎の人道的な行いに光が当たるべきである。そのように強く考え、平成二八年八月に「根井三郎を顕彰する会」を宮崎市佐土原で発足させた。

「命のバトンリレー」

●ユダヤ人難民にとってヨーロッパから脱出ルートとしては、リトアニアからモスクワに行き、シベリア鉄道でウラジオストクへ、そこから船で日本に渡り、日本を通過し、第三国（オランダ領　キュラソー島カリブ海にある）へのルート。実際は、アメリカ・カナダ・中南米・オーストラリア・上海へ

●顕彰する会は、顕彰活動を通して、これまで、「杉原ビザ（命のビザ）」として伝えられていた話は、「命のバトンリレー」ではないか？と考えるようになり、この「命のバトンリレー」の中で、根井三郎について、根井三郎の人道的な行いについて、多くの宮崎の方々に知って貰いたい、伝えて貰いたいと考えている。

杉原千畝（命のバトンを送る）→根井三郎（命のバトンを繋ぐ）→小辻節三（命のバトンを受ける）

●小辻節三…神戸港からユダヤ人難民達を第三国への出国に奔走した。（日本におけるユダヤ人難民達の滞在期間を延長させた）

◆この「命のバトンリレー」では、根井三郎の役割を「バトンを繋ぐ」としていますが、これは、杉原千畝が発給したビザの流れである。しかし、今回の根井三郎が発給したビザの発見でも分かるように、根井三郎は自分自身の、単独でビザを発給したという事実を確認することができたということである。

資料：根井三郎を顕彰する会より提供

ビザ発給要件

1 現滞在国からの出国許可（リトアニア）
2 最終受け入れ国の許可（オランダ）
3 通過国の許可を得る（ソ連・日本）
4 最終受け入れ国までの十分な旅費
5 ビザ発給に問題がないという身分証明書提示

●当時、ビザを発給するには、これら要件をすべて満たす必要があります。

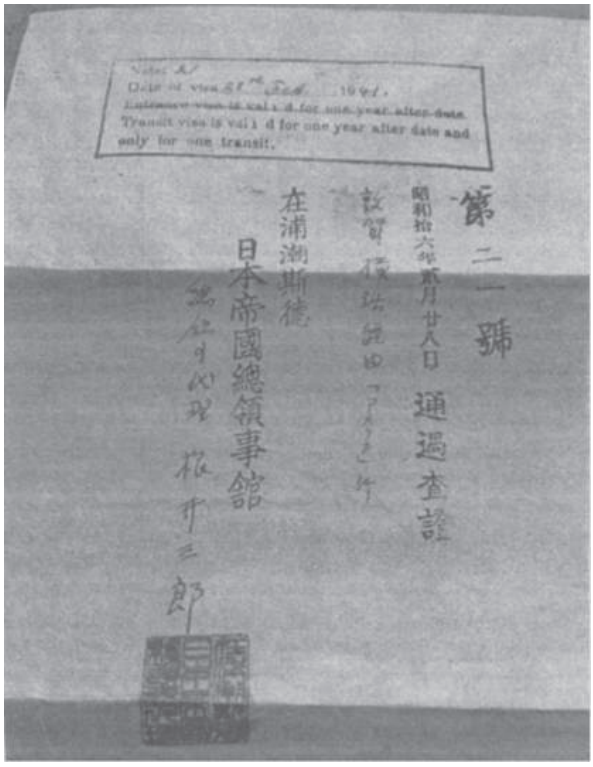
当時、日本は、ユダヤ難民の受入は拒否していた。しかし、日本国通過は認めていた。

●根井三郎が発給したビザの内容は次のとおりである。

第二一号
昭和十六年六月二十八日　通過査証
敦賀横浜経由「アメリカ」行
ウラジオストク
日本帝国総領事館
総領事代理　根井三郎　総領事代理の公印

「根井三郎が発給した渡航証明書」↑

今回新しく出てきた「根井三郎が単独で発給したビザ」→



上資料 2 点：北出明氏提供

「アメリカに落ち着いた頃の一家」
ポーランド人（1908 年 8 月 31 日ワルシャワ生）
Simon　Korentajer（シモン・コエンタイエル）
妻 Emma（エマ）　長女 Felicia（フェリシア）
●フェリシアさんの次女　キム・ハイドンさんの提供によるもの
●シモン・コエンタイエル夫妻の次女で、フェリシアさん次女の
　キム・ハイドンさんが、上のビザを大切に保管していた。

画像：根井三郎を顕彰する会提供

私の推測であるが、シモン・コエンタイエル夫妻が自分の子ども、孫にもこのビザの由来と大切さを語り継いでこられたのではないか。つまり、「このビザのお陰で、みんながこのように楽しい生活を送ることが出来ている。」ということ等……そのことを考えると根井三郎の存在と業績を証明する唯一の資料が出てきたということで涙が出るほどありがたく、また、本当に大事に保管していただきました。という感謝の気持ちでいっぱいである。

●このビザは二一号なので、もっと発給されているのではないかとも考えている。しかし、このシモン・コエンタイエルさん夫妻のように、孫の世代にまで残されているかどうかに、一抹の不安は感じているが、私たち「根井三郎を顕彰する会」は、新たなビザ所有者を捜していなければならないと考えている。

●今回の根井三郎が発給したビザの発見は、大きな反響を及ぼしました。私どもは、根井三郎が自分自身でビザを発給したということを、語ったことがあるという情報を、ロシア国立人文大学教授で根井三郎研究者イリヤ・アルトマン教授の話では聞いていました。現に、ビザの存在が明らかになったことで、大きな自信に繋がりました。アルトマン教授は「根井三郎が発給したビザは、五五件以上にのぼる」とも言っている。

「根井三郎が発給したビザ発見に伴う新聞報道等」

◆地元三社の放送局にも大きく取り上げていただき、県民への発信が出来たと感謝している。地元紙「宮崎日日新聞」も、大きく一面に取り上げていただき、全国紙の「朝日新聞」「毎日新聞」。地方紙の「西日本新聞」「中日新聞」等でも、大きく取り上げていただいた。

◆児童生徒向けにも「宮日子ども新聞」が一面に、「根井三郎命のビザ発見」という見出しで、全国版の「朝日小学生新聞」にも一面に、「命のビザ発給の外交官はもう一人いた根井三郎の資料みつかる」という見出しで、小学生に分かりやすく取り上げてくれている。同じ「朝日中高生新聞」でも「命のビザ発給功績に新たな証拠　外交官根井三郎」という見出しで、中学生、高校生向けの文面で取り上げてくれている。

根井三郎発給ビザ発見

第2次大戦中 ユダヤ人の命つなぐ

宮崎市出身 外交官 単独で救済 裏付け

旧広瀬村（現宮崎市佐土原町）出身の外交官根井三郎（1902～92年）＝写＝が、第2次世界大戦中にナチス・ドイツの迫害から逃れたユダヤ人に発給したビザ（通過査証）が米国で見つかった。根井がビザを発給したとする旧ソ連側の記録はあったが、実物の確認は初めて。関係者は「根井が単独で難民を救済した裏付けとなる貴重な資料」としている。

根井三郎（根井三郎を顕彰する会提供）

発見者は、ユダヤ人難民に関する調査がある東京都在住のフリーライター北出明さん（76）。難民名簿などを調査する過程で、ポーランド出身のシモン・コエンタイエルさん一家が根井のビザで来日していたとの情報を入手。4月下旬に孫のキム・ハイドンさん（53）＝米国在住＝からビザの画像データを入手し、確認した。

1941（昭和16）年2月26日発給のビザには、手書きで「教員　横浜経由『アメリカ』行」と書かれており、根井の直筆署名とともに、当時就いていたウラジオストク総領事代理の公印が押されている。

北出さんによると、一家は、ナチス・ドイツが侵攻したポーランドを脱出、ウラジオストクで根井が発給したビザを入手した。41年6月16日に横浜経由で米国へ渡航した。

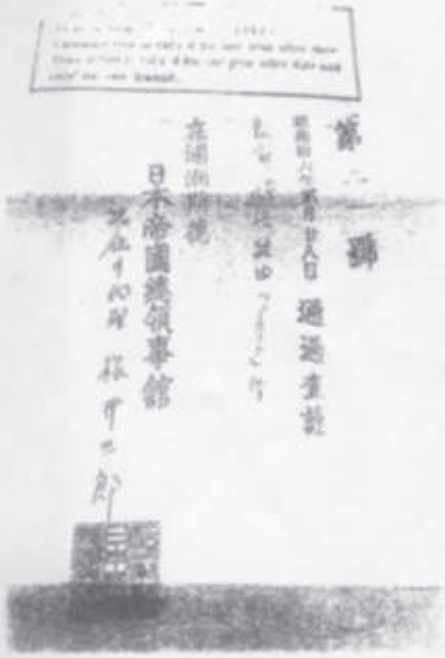
根井のビザ発給については、ロシアの対外政策アーカイブに保管されている、同年3月23日の旧ソ連側との会談内容を記した文書に「わずかではあるが、本省（外務省）の許可を得ずに一家族の通過ビザを難民に発給した」と根井が述べたとの記録がある。

ユダヤ人難民などの資料を長年調査の資料館「人道の陸（おか）」（東京）の西川明運営委員は「ビザと会談記録の日付に整合性がある。根井が単独で命をつなぐ投票を果たした裏付けとなる資料」と評価。発見を受けて2日、宮崎市役所で会見した「根井三郎を顕彰する会」（宮崎市）の根井貴会長は「ビザには『27枚』とあり、他にも残っているかもしれない」と話した。

難民救済を巡っては、外交官杉原千畝が人道的立場から発給したビザに、根井が署名・捺印し、日本への渡航を許可した「命のパスポート」が知られている。杉原が発給し、根井の署名が記されたビザは、イスラエル国立資料館が保管している。（草野拓郎）

根井三郎

広瀬尋常高等小（現広瀬小）、長崎県立大村中（現大村高）卒。1921（大正10）年4月、外務省留学生試験に合格し、ハルビンの日露協会学校へ留学。旧ソ連やイランなどでの勤務を経て40（昭和15）年、ウラジオストク総領事代理に就いた。戦後は鹿児島や名古屋の入国管理事務所長などを務めた。



米国で見つかった根井三郎がユダヤ人難民に発給したビザ（通過査証）の写し（北出明さん提供）

宮崎日日新聞社掲載　2020（令和2）年　6月3日付1面より

東京新聞 夕刊 2020年（令和2年）6月3日（水曜日）

命のビザ 新たに確認

根井三郎

ユダヤ人一家の渡米手助け

第二次世界大戦中、旧ソ連の駐ウラジオストク総領事代理を務めた根井三郎さん（一九〇二～九八年）が、ナチスドイツの迫害から逃れたユダヤ人難民に発給した日本通過ビザが初めて発見された。根井さんが独断でビザを発給したための経過説明は二〇一七年にロシアで見つかっており、この調査に携わった大学教授は「証拠を裏付ける確実な資料」とみる。ユダヤ人難民を救った「命のビザ」は駐リトアニア領事代理の杉原千畝が有名だが、「根井ビザ」の発見者は「陰の功労者」にも光を当ててほしいと話している。（高野孟記者）

ビザは一九四一（昭和十六）年二月二十八日、ポーランド出身のボルシモン・コエンタイエルさんと妻、娘の一家三人に発給されたもの。「教育・機関経由ブラジル」と書かれ、根井さんの署名と、在ウラジオストク（ウラジオストク）総領事館（ウラジオストク）総領事代理の印が押されている。「第二号」と通し番号が振られ、少なくとも他に二十枚発給されたと推測できる。当時、外務省は行き先国の入国査証がない者へのビザ発給を認めておらず、根井さんが独断で出したとみられる。

根井さんは、ユダヤ人難民に関する著作のあるフリーライター北出明さん（六〇）＝東京都中野区在住＝が、難民の生存者調査をする中で、神戸市の居住者お宅から一家に注目、新聞記事などから、米国に住むシモンさんの姪フェリシアさんらを突き止めた。ビザは一家の歴史を知ろうと調査に協力する孫のキム・ハイドンさんらから提供に協力で入手した。

一家のパスポートやお祈りが確認できる当時の資料によると、三人は三五年九月にナチスのポーランド侵攻に伴い、リトアニアへ避難、四一年三月にモスクワの米国大使館で経由ビザを申請したが却下され、ウラジオストクへ。当地で根井さんから受けたビザは、米国大使館が出したパスポート通知書の裏に書かれており、切迫した状況がうかがえる。同年三月に福井県の敦賀港から入国して神戸市に直行後、中国上海へ出国、戦後、米サンフランシスコに渡った。

二〇一七年に国士舞大のナコラ・ジンベルグ教授がロシア側と行った共同研究で、根井さんが本国の許可を得ずに通過ビザをわずかに発給したことを、旧ソ連の外交官に話したとする会話録がロシアの公文書館で見つかった。ジンベルグ教授は「新しい発見なので検証が必要」としつつ、「本物と思う。当時有効だった経路ビザは偽造品が難民の間で出回っていたが、数が少ないとされる根井ビザは偽造品ではないだろう」と語る。

北出さんは「ユダヤ人難民の救出は杉原さん一人だけでなく、根井さんらいろいろな人物の協力があった。そこに思いを寄せることが正しい歴史認識につながる」と話している。

駐ウラジオ総領事代理

ねい・さぶろう　宮城県（旧宮城村）出身の外交官。1922年（大正10）年に旧満州の日露協会学校に入学、2期生として杉原千畝がいた。40（昭和15）年12月からウラジオストクで勤務。戦後は法務省に移り、名古屋入国管理事務所（現・名古屋出入国在留管理局）の所長を最後に引退した。41年3月、ビザによる入国管理の対応に苦慮していた外務省は、根井さんに対し、ビザの再発行を申し出たが、一度発給したビザを撤回することは「国際的信用から考えて適当からず」と反論、難民たちを救い続けるよう背中を押した。

東京新聞 夕刊
中日新聞東京本社
雨宮商事株式会社
141 雨宮ビル
☎03-3342-0141

紙面から

「在宅」効果 ズーム急伸

在宅勤務で利用されるネズーム・ビデオ・コミュニケーションズの売上高が大幅に増えた。（本社撮影・ハリ子）

作ガ

東京新聞社掲載　2020（令和2）年6月3日付夕刊1面より

毎日新聞社掲載　2020（令和 2）年　6 月 6 日付夕刊　1 面より

「アメリカにおける報道」

◆また、アメリカに於いても今回のビザ発見のニュースを取り上げてくれている。「ARCHAREOLGY」（考古学）という、論文であるが、中身を要約すると、MIYAZAKI、JAPAN―The AsahiShinbun「朝日新聞は、ライターの北出　明さんが、ソビエト連邦の日本領事の根井三郎により発給されたビザを探し当てた」と報道した。内容は大体次のようなものです。

一九三九年にポーランドへのナチスの進入の前に、ウラジオストクに逃げていたユダヤ人難民のシモン・コエンタイエルに対してのものである。

シモン・コエンタイエルさんの孫キム・ハイドンさんは、一九四一年にウラジオストクの根井三郎によって発給されたビザをずっと持っていた。

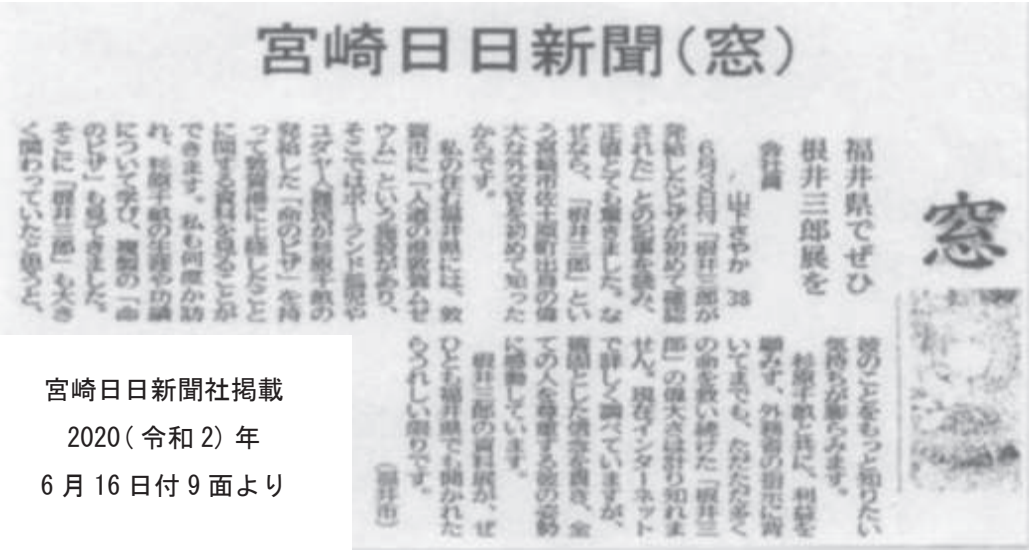
その国の外務省によって行われた政策方針を破ったことにより、コエンタイエルさん、彼の妻、娘達は日本に逃げることが出来た。これまで、いくつかの記録はあるが、今回、再発見されたユダヤ人難民に対しての根井から出された初めてのビザである。

二一という数がこのビザに記されているが、根井が二十かそれ以上の数を発行していたことが考えられる。（※この部分を根井三郎が発給したビザを持っている子孫が読んでくれることを私は願っている。）

「私は、根井三郎が危険を冒して人道的な行為を遂行したことが、確証され、とてもうれしい。」と、根井三郎の名誉を探る会（顕彰会）の根井　翼氏は語っている。（直訳するとこのようになるらしいです。）

シモン・コエンタイエル家は、一九四七年にサンフランシスコに移住する前に、上海で六年過ごした。

「福井県の方の宮崎日日新聞　窓　の欄への投稿」



宮崎日日新聞（窓）

窓

福井県でぜひ
根井三郎展を

会社員　中平さやか　38

6月2日付「根井三郎が発給したビザが初めて確認された」との記事を読み、正直とても嬉しかったです。なぜなら、「根井三郎」という宮崎市佐土原町出身の偉大な外交官を初めて知ったからです。

私の住む福井県には、敦賀市に「人道の港敦賀ムゼウム」という施設があり、そこではポーランド難民やユダヤ人難民が杉原千畝の発給した「命のビザ」を持って敦賀港に上陸したことに関する資料を見ることができます。私も何度か訪れ、杉原千畝の生涯や功績について学び、複製の「命のビザ」も見てきました。そこに「根井三郎」も大きく関わっていたと聞くと、彼のことをもっと知りたい気持ちが膨らみます。

杉原千畝と共に、利益を優先す、外務省の指示に背いてまでも、ただただ多くの命を救い続けた「根井三郎」の偉大さは計り知れません。現在インターネットで詳しく調べていますが、職員とした使命を貫き、全ての人を尊重する彼の姿勢に感動しています。

根井三郎の資料展が、ぜひとも福井県でも開かれらられしい限りです。

（福井市）

宮崎日日新聞社掲載
2020（令和2）年
6月16日付9面より

このように、今回のビザの発見は、宮崎のみならず、全国的に根井三郎の存在と業績について、大きく発信することができている。

◆また、あらゆる方面から「根井三郎と言う人を初めて知った」「もっともっと知りたい」「すごい人が宮崎県出身でいたんですね。」

◆「すごいことです。宮崎県人として誇りです」等々。

ツイッターでも多くの反響がありました。しかし、もっともっと発信していかなければならないと考えている。皆様方からも、どうぞ、根井三郎について発信していただくことを期待しているところである。

◆今回のビザ発給の発見は、北出　明氏のご尽力によるものです。北出氏は、杉原千畝のビザを通して根井三郎の存在を確認し、多くの講演の中で、根井三郎の業績を話されるとともに、ビザ発給の事実について研究を深めていただいています。私も二回ほどお会いしてお話をさせていただきました。一回目は、佐土原に直接お見えになりました。二回目は東京の久我山でお会いしました。

◆根井三郎は。

一九〇二年（明治十五年三月十八日）生
一九一四年（大正三年三月二五日）旧広瀬村広瀬尋常高等小学校（現広瀬小学校）卒業（※昨年、明らかになる。）
一九一六年（大正五年四月）長崎県立大村中学校入学
一九二一年（大正十年三月）長崎県立大村中学校卒業（現大村高校）
一九二一年（大正十年四月）外務省留学生試験に合格
一九二一年（〃　十月）ハルビンの日露協会学校（後のハルビン学院）に留学（二期先輩に杉原千畝がいた。）外交官として旧ソ連やイランなどでの勤務を経る。
一九四〇年（昭和十五年）ウラジオストク総領事代理に就任
一九四四年（昭和十九年）にウラジオストクから帰国
一九四五年（昭和二十年）日本国内で終戦を迎える。この年、外務省では大幅な人員整理が行われ、根井三郎は職を失います。
一九五〇年（昭和二五年）大蔵事務官就任（大蔵省）
一九五二年（昭和二七年）入国管理庁外務技官に任命される（法務省）
一九五七年（昭和三二年）鹿児島入国管理事務所長
一九六二年（昭和三七年）名古屋入国管理事務所（現在の管理局）所長を退職（東京都に自宅）
一九九二年（平成四年）永眠（享年九十歳）

◆東京に住んでから、「宮崎の佐土原に帰るんだ」といつも言ってたと聞いている。

画像：根井三郎を顕彰する会より提供

「東京久我山喫茶店『豆の木』」

◆お孫さんの根井茂美さんの話によると、久我山に住まれてから、晩年は近くの喫茶店「豆の木」によく行かれており、日課だったようである。私どもも直接「豆の木」を伺いました。そこのマスターは、残念ながらご存知ありませんでした。年齢的な差でしょうかね。

「井の頭公園」

画像：根井三郎を顕彰する会より提供

◆「井の頭公園」もよく散歩されていたようです。私どもも行ってみましたが、池の端に橋が架かっており、その橋から見る光景が出身の佐土原の福島地区の川に似ているようであり、本人もそのように思っていたようである。

◆また、地区の俳句会にも所属していたという情報もあり、調査をしましたが、確実な情報を得ることは出来なかった。

東京都杉並区の区役所を訪問し、根井三郎に関する資料や情報の取材を行ったが、「根井三郎のことを初めて聞いた。」という話や杉並区の歴史資料にも根井三郎の存在を確認することは出来なかった。このような状況で全く知られていないという現実を確認したところである。

◆「久我山東」の自治会長さん（庄司芳明様）にもお会いして、根井三郎の話を聞いていただきましたが、根井三郎さんの息子さんの根井　繁さんとのつきあいはあったようで、根井家の墓の墓石を創られた方のようです。「東久我山自治会回覧の久我山昔話一二九」で根井三郎の紹介をしていただいています。

六月三日付けの「東京新聞夕刊」に根井三郎発給のビザ発見の記事が一面に掲載されていたので、私に贈っていただきました。ありがたいことです。中央でも根井三郎のことを発信することが出来ました。私どもは、このようにして輪を広げる努力をしています。

「東久我山自治会回覧」

11月24日 資源回収日 朝9時～

①古新聞 ②雑誌、折込広告 ③段ボール ④使用済切手 ⑤牛乳パック ⑥ペットボトルキャップ 6品目を回収します。

<R1年10月の回収実績>

資源回収量 11,450kg
その売却代金 44,083円
杉並区報奨金 80,150円
合計 124,233円

ご協力に感謝いたします。

久我山昔話129 命のバトンリレー
久我山四丁目に住んでた根井三郎さん
（平成4年3月31日亡90歳）は、杉原千畝さんがリトアニア・カウナスで、ユダヤ人難民に発給したビザを、ウラジオストクで受け、命のバトンを繋いで難民を日本行きの船に乗せた。
今は北烏山の西徳寺の墓地（中央高速道路近くで眺めるように建てられたお墓）に眠っている。
宮崎市・根井三郎を顕彰する会の資料より
https://www.actiel.jp/works/555/

東自治会 入会ご希望の方へ
申込書をお届けしますので、久我山東自治会ホームページ

餅つき大会 12月8日(日)
第6回年納め餅つき大会12月8日午前11時より久我山東原公園で
搗立て餅プレゼント・子供の餅つき・独楽まわしを、お楽しみください

昨年の餅つき大会スタ

久我山東自治会 かいらん 令和元年11月号 NO.326

祝 敬老 70歳以上の会員と70歳以上の同居家族に、敬老祝を（振込詐欺防止録音機）送り

画像：根井三郎を顕彰する会より提供

第二次世界大戦中の日本政府トップからの命令を、何故？根井三郎がここまで毅然と反論し、自分自身の判断で、ユダヤ人難民を船に乗せたのか？根井三郎には、大きな苦悩があったと思われる。私ども、「根井三郎を顕彰する会」は、根井三郎がウラジオストクで行った人道支援は、まさに、「郷土の偉人」と呼ぶにふさわしい行いであると考えている。

○県内の状況

※令和元年六月十八日の県議会一般質問で横田照雄県議会議員が、河野県知事に、「根井三郎氏顕彰について」と題して、質問がなされました。

■河野知事の主な答弁内容

▲「根井三郎氏の決断は、戦時中の極限的な場面においてたいへん困難を伴うものであったと思われますが、人道的な行為として高く評価されるべきものと感じております。」

▲「私も、平成二八年の顕彰会の講演を聴講させていただきましたが、本県には命のリレーの中で人道的な見地から重要な役割を果たし、立派な仕事をされた先人がいらっしゃるということで、県民として誇らしく感じたところであります。また、以前外交官を志しておりました私としても、特に感銘を強く受けたところであります。今後、資料や情報の収集調査が更に進み、根井三郎氏の功績や生涯など、その人物像が史実に基づいてより明らかになっていくことを期待しているところであります。」

▲「現在、宮崎市や地元顕彰会、大学や民間の研究者などにより、国内外で調査研究が進められているところであります。県といたしましては、今後、それがより明らかになってくる功績等を踏まえまして、根井三郎氏に関する講演会の開催など、顕彰について検討してまいりたいと考えております。」

また、宮崎市議会では、令和元年十二月の一般質問で、時任さおり議員が「根井三郎」の顕彰について、市長の考え方を質問いただきました。

■市長の答弁内容　「現在、根井三郎を顕彰する会の皆さんが、資料等の発掘や整理、お孫さんとの連絡等を通して、業績の顕彰を行っていただいていますし、資料展等を開催していただいて、広く、市民への周知努力をいただいています。市としましても、郷土の偉人であるという考え方に立って、今後進めていきたい」という前向きな答弁をいただきました。

※令和二年六月十六日の県議会一般質問で、横田照雄議員が再び質問されました。

「米国で発見されたビザを入手し、県の重要文化財として保管展示できないか」

■知事の答弁内容　「資料が残っていないことが課題であったが、宮崎市や顕彰する会などを中心に、調査研究が進んでいる。顕彰方法やビザの入手については、同市と連携し検討したい」という、答弁でございました。

また、同年六月の宮崎市議会に一般質問で、大場祥子議員が質問されました。

「多くの命を救った人道的な行動を、子どもたちに語り継ぐための学校での取り組みについて」

■教育長の答弁　「本年度は、社会科副読本の改訂作業を予定しておりますので、根井三郎の業績について具体的に掲載し、授業において適宜取り扱うことが出来るように進めて参ります。」

宮崎市教育委員会では、小学校三年生が使用する社会科の副教材に根井三郎の顔写真や具体的な功績を掲載し、二〇二一年度から授業で扱うことにしています。

※このように、宮崎県議会・宮崎市議会においても根井三郎についての具体的な動きが少しではあるが、出てきています。私どもは、「宮崎県出身の外交官　根井三郎」として、もっともっと周知していかなければならないと考えています。県民の皆様の意識の高揚を図っていくことが出来るように、さらに努力を重ねていきま

すので、皆様方のご理解とご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

◆顕彰活動はたいへん困難でございます。根井三郎の書物があるわけでもないし、根井三郎をよく知っている人物が生きているわけでもなく、顕彰活動は本当に困難なものでございました。現在も同じですけど…

私どもは、研究者の調査結果による調査結果や関係機関等との調査を進めてきました。研究者の調査内容についても、書物として出版されているものはなく、根井三郎の活動を入手するのは、極めて困難でございました。ほとんどの研究者が杉原千畝についてのものでした。

しかし、杉原千畝が発給したビザを持っているユダヤ人難民達が、どのようにしてウラジオストクから日本の福井県の敦賀港に渡ることが出来たのかが、研究者の中でも、ウラジオストクについての研究に目が向くようになり、根井三郎が大きくクローズアップされてきたわけです。

根井三郎のウラジオストクおける行動を一番理解していたのが、ロシアの研究者イリア・アルトマン教授である。このアルトマン教授に大きな刺激を受けたのが、国士舘大学教授のジンベルグ・ヤコブ教授である。アルトマン教授もヤコブ教授も根井三郎の実績を高く評価されており、ウラジオストクからユダヤ人難民達を福井県の敦賀港に送り出していることに業績の高さを言っておられる。

根井三郎の行った行動は、イスラエルの「ヤド・バシェム賞」に該当する人物として申請されている。

「ヤド・バジェム賞」とは、「諸国民の中の正義の人」と言い、ヘブライ語である。

「諸国民の正義の人」とは、ナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅、即ち、「ホロコースト」から自らの生命の危険を冒してまで、ユダヤ人を守った非ユダヤ人の人々を表す称号。「正義の異邦人」とも呼ばれるというもので、日本では、杉原千畝が「ヤド・バシェム賞」を受賞している。

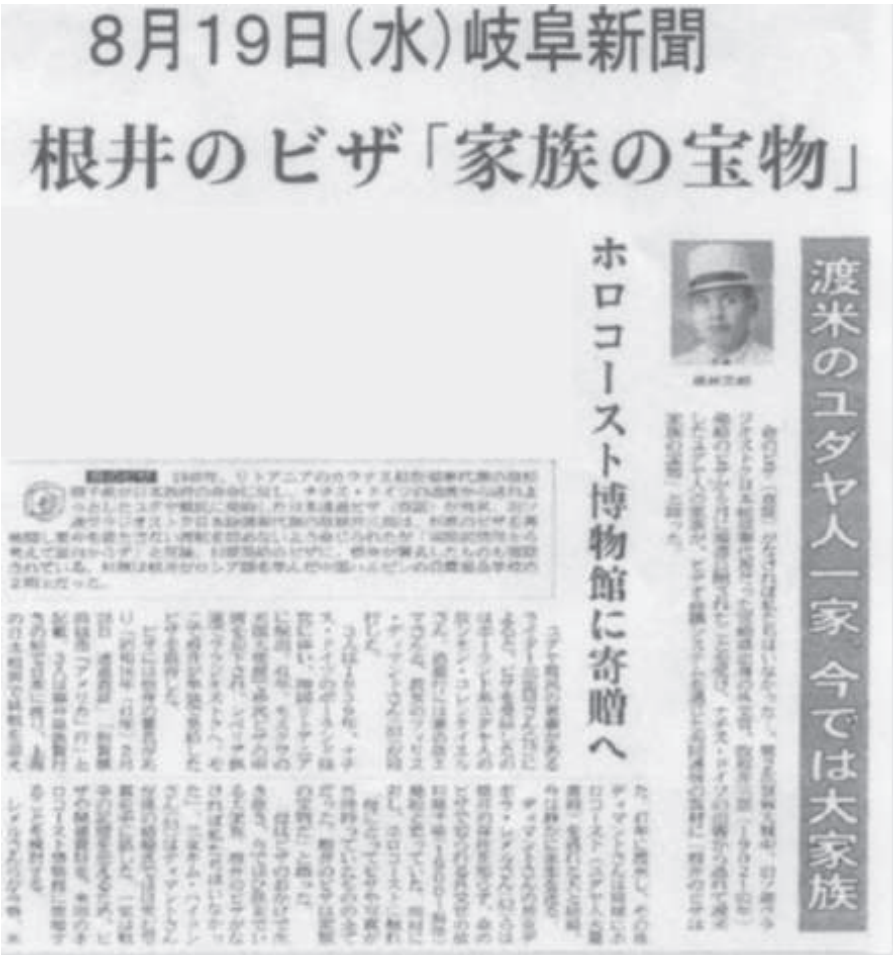
私たち「顕彰をする会」としましても、根井三郎の人道的な行いは、高く評価されるべきものであり、「ヤド・バシェム賞」に十分該当するものだと確信している。賞が実現するように、これからも更に活動を続け、新しいビザの発見に繋がるように努力して参りたいと考えている。

◆本日は、杉原千畝、根井三郎、小辻節三、当時のユダヤ人難民の置かれた状況等を含めてお話しいたしましたが、もっともっと情報を集め、根井三郎の人物像が浮かび上がるように努力して参りたいと考えています。

皆様方からの根井三郎に関する情報等にも大きな期待を寄せています。

◆共同新聞の調査によるものを、岐阜新聞が八月十九日付けで掲載した内容。この記事の中にも、根井三郎の存在は知らずに、杉原千畝が発給したビザと思っていたと記されている。

取材の中でも、キム・ハイドンさんは、「母にとって、ビザや写真が当時持っていたもののすべてだった。根井のビザは家族の宝物だ」と語った。「母は、ビザのお陰で生き抜き、今はひ孫までいる大家族。根井のビザがなければ私たちはいなかった。」と語っている。



8月19日(水)岐阜新聞

根井のビザ「家族の宝物」

渡米のユダヤ人一家、今では大家族

ホロコースト博物館に寄贈へ

根井三郎の画像：
根井三郎を顕彰する
会より提供

共同通信社配信　岐阜新聞社掲載　2020(令和2)年　8月19日付夕刊　28面より

「日露協会学校　自治三決」

最後に、杉原千畝と根井三郎が共に学んだハルピンにある「日露協会学校」のモットーである「自治三決」をご紹介して終わりに致します。

○人のお世話にならぬよう
○人のお世話をするよう
○そして報いを求めぬよう

ご静聴ありがとうございました。

この作品について

複製（コピー）・転載・転記等での利用禁止

「神話の源流『宮崎』で、地球人を」

宮崎国際大学
学部長補佐・地域連携センター副長
ウォーカー・ロイド

目次

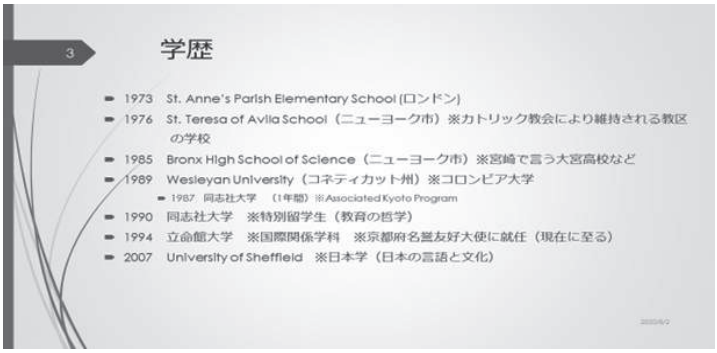
一　自己紹介　～　生い立ちについて
二　日本での体験
三　宮崎人への進化
四　宮崎と仕事及び宮崎の文化について
五　宮崎と日本に対する希望と期待
六　コロナ・少子高齢化・グローバル化に対応する日本と宮崎の将来への展望

一　自己紹介　～　生い立ちについて

社会がグローバル化していく中で、宮崎の社会と文化は次第に進化していくでしょう。本日の講演はコロナ禍の中で、宮崎のグローバル化をどう実現していくのかを考える良い機会であると考えます。宮崎に移住した外国人の体験と観点から宮崎人、特に宮崎の若者の地球人化を考察します。前半の自己紹介を通して、これまで生きてきたグローバル社会と当時の時代背景について触れながら、日本での体験と私自身の宮崎人への進化について述べます。

後半では、宮崎に対する思いと期待について話していきたいと思います。

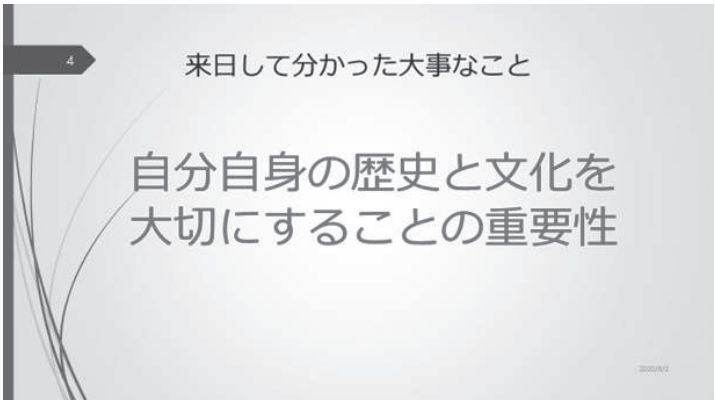
まずは自己紹介です。



振り返ってみると私はグローバルな人生を歩んできました。イギリスとアメリカの小学校、グローバルな街ニューヨークの高校、米国コネチカット州や日本・イギリスの一流大学で学ぶことができたことに感謝しています。そしてそのことを可能にしてくれた母親、友人、親戚、同僚などの方々にも大変感謝しています。

私が今日抱いている人生観やグローバル化の重要性に対する意識の高さは、これまでに体験してきたさまざまな国の異文化交流と教育の賜物であると考えます。

グローバリゼーションは現代社会における最近の現象であり、テクノロジーの急速な進歩、国際旅行の促進と加速、ＩＣＴ、グローバル通信ネットワークの発展、そしてテクノロジーの進歩によって経済が相互作用し、地球規模で発展してきたといわれています。



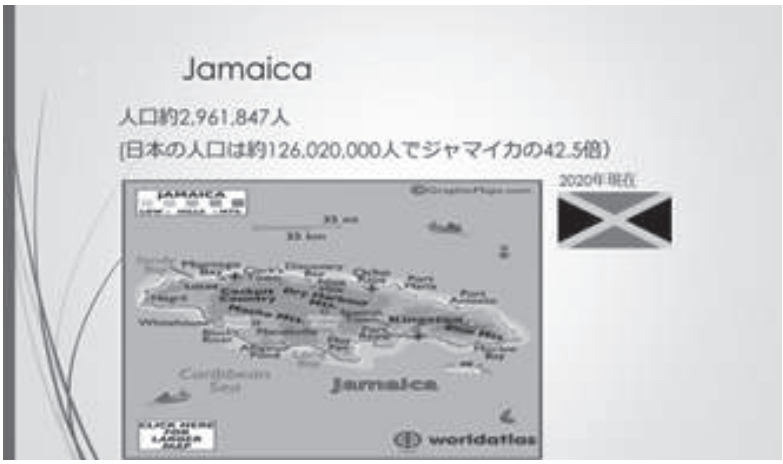
実は、宮崎国際大学が開学した当時、キャンパス全体のインターネットシステムを導入した大学としては日本初でした。イーサネットケーブルを配線し、すべてのルーターとスイッチを接続する技術スタッフが作業していた姿を鮮明に覚えています。それがほんの２６年前であると考えると、グローバリゼーションが現代社会の現象と言われる人々がいる理由がわかります。

しかしグローバリゼーションは、最初の人がアジアとアフリカを離れ、地球の向こう側に定住したときから始まったともいえます。グローバリゼーションは、北欧人が近隣諸国を略奪した時や、ドイツ、フランス、スペイン、イギリス、トルコ、エジプト、フェニキア、ローマなどの帝国が土地、富、食物、貴金属、スパイス、彼ら自身の土地では生産できなかった資源を求めて海や国境を越えたときにも起こりました。

そのような侵略行為の意図はおそらく友好的であったとは言えませんが、それらの歴史は新しい文化と現象を生み出し、貴重な遺産を残し、多文化、多民族、多言語社会の創造を促進させたことに違いありません。侵略行為は、ある意味、侵略者と侵略された側の両方の土地を豊かにし、お互いにより豊かな食文化、アイデア、展望、そしてより広い世界観をもたらした場合もあったでしょう。

私はもちろん侵略行為を正当化しているわけではありません。しかし、異国や異文化間の交流から得られる、ポジティブな相互作用は明らかにあると思います。また、年齢を重ねるにつれ、異文化間の交流や文化の融合こそが世界平和を達成するための最良の方法ではないかと確信が深まってきています。この考えはあまりにも単純で、楽観的すぎるのでしょうか。

楽観論をさておいて、今日は、これまでに触れてきた諸外国文化や歴史を紹介しながら、私自身の体験の振り返りを通してグローバリゼーションという現象について皆様と一緒に考えてみたいと思います。



私はジャマイカというカリブ海にある小さな島に生まれました。ジャマイカをご存じの方はいらっしゃいますか？

ジャマイカは多文化の歴史を持つ、ほぼ３００万人の国です。カリブ海の主要経済国の１つでもあり、この小さな島国のＧＤＰは１４３．６億ドルです。ジャマイカは天然資源に恵まれていますが、貧富の差が激しくて、国の失業率は１３．１％です。観光、農業、鉱業、製造業は国内最大の産業であり、ジャマイカのＧＤＰのそれぞれ約３０％、６．６％、４．１％、２９．４％を占めています。

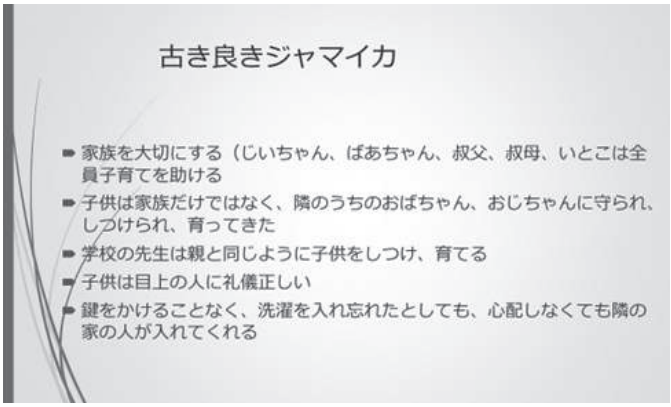
また、コーヒー（ＢＬＵＥ　ＭＯＵＮＴＡＩＮ）、世界クラスの陸上選手、レゲエ音楽でも有名です。国の地理は、クリストファー・コロンブスによって発見された１４９２年以来のスペイン人やイギリス人との出会いの痕跡（コンセキ）を未だ示しています。地名にはスペイン由来の「Ｏｃｈｏ　Ｒｉｏｓ」Ｐｏｒｔ　Ｍａｒｉａ、Ｓｐａｎｉｓｈ　Ｔｏｗｎ、Ｍｏｎｅｔｅｇｏ　Ｂａｙ、そしてイギリス（特にＷｈａｌｅｓ、Ｉｒｅｌａｎｄ、Ｓｃｏｔｌａｎｄ）由来のＭｏｒｇａｎ　Ｂｒｉｄｇｅ、Ｂａｎｇｏｒ　Ｒｉｄｇｅ、Ａｂｅｒｄｅｅｎ、やＣｈａｒｌｅｍｏｎｔなどがあります。

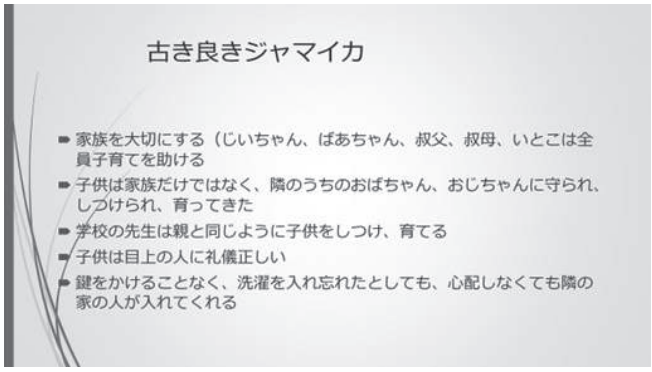
ジャマイカは、素敵なビーチやダンズリバーの滝などの観光名所でも有名です。多くの港と果樹園があり、かつては海賊のお気に入りのドッキングポートでした。また、クールランニングやジェームズボンドの「ドクターノー」、トムクルーズの「カクテル」、などの映画のロケ地としても使われています。

ウサインボルトなどの有名なアスリート以外にも、コリンパウエルなどの有名人や、私のようなジャマイカの血を引いた著名人が多くいます。ジャマイカの多面的な文化は、植民地化、奴隷制、義理の奴隷制から来ています。その人々は ウォーカー、クロフォード、ウィルキンス、ジョーンズ、ミラーなどの名前があります。イギリス人、スコットランド人、ウェールズ人の子孫が多く、これらの名字は人々の多様性を反映しています。

昔のジャマイカは家族を大切にし、核家族ではなく大家族が多かったです。母親は８人兄弟、僕は９人兄弟、いとこは数えきれないほどいます。

私のジャマイカでの生活は6歳までした。そのために記憶が薄いですが、今でも記憶に残っているのは親戚が商売をしていたこと、家族に囲まれていた、そんな日常が非常に幸せだったことです。しかし、多くの植民地がそうであったように、当時のジャマイカも経済格差、不安定な政治的情勢など、様々な社会問題を抱えていました。当然そのような社会的な不安定の中では、教育の不平等や不当な労働条件などから脱出し生活の質を向上させることが非常に困難な状況でした。そのため、多くのジャマイカ人は愛する母国を離れ、他国へ移住することを決心したのです。





移住の対象国が特に多かったのは、第2次世界大戦後のイギリスでした。当時のイギリスは労働者人口が激減したため、50年代から60年代にかけて植民地だったジャマイカなどから多くの移民を受け入れる政策を打ち出しました。イギリスの他にも、アメリカやカナダに移住したジャマイカ人の数も少なくはありません。移住の目的はもちろん、家計の基盤を改善し、より良い教育を得ることで生活の質と家族全体の生活の豊かさを向上させる機会を追求することでした。私の家族は商人であったのでおそらく他人と比較すれば裕福な生活を送っていましたが、そのような私たちが移住を選択したことも決して例外ではありませんでした。

1973年、その2年前にアメリカに移住した母親を追いかけて、6歳の私は9歳の姉と一緒に飛行機に乗り、ニューヨークに移住しました。冷戦の真っただ中、様々な社会問題を抱えていたアメリカとの最初の出会いはカルチャーショックの連続でした。

まずは食べ物。アメリカンフードとして知れていたもののターキー、KFC、ピザ、マヨネーズなど、ほぼすべてダメでした。せっかく作ってくれた弁当も食べられず、友人にあげていたことも覚えています。

当時住んでいた地域は決して悪い環境ではなかったのですが、歩いて5分先の治安は良いものではありませんでした。玄関の向こうの世界か

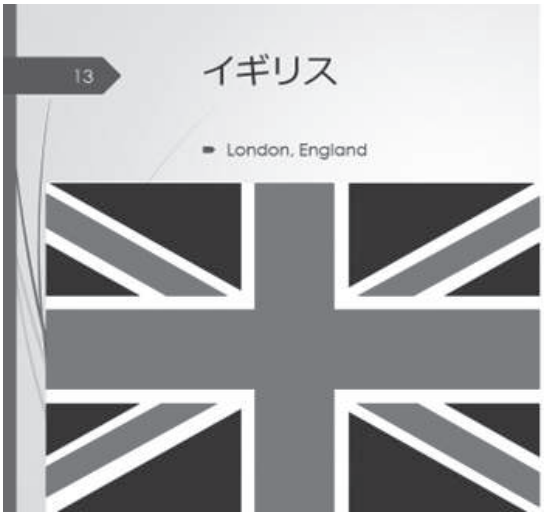
ら守りたい一心で、私たちを厳しく取り扱う母親の過度な保護は、今となっては愛情の裏返しだとわかりますが、鍵っ子であった私たちの日々の自由の無さは耐えがたいものでした。母親や祖父母が不在時には外で遊ぶことができませんでしたし、近所の駄菓子屋さんまで1人で歩いてアイスクリームやキャンディーを買いに行くような自由を楽しむこともできませんでした。

そして、初めてのアメリカの小学校も印象に残っています。ジャマイカから来たばかりの私は、ジャマイカ人としてのふるまいや言葉遣いなどがニューヨークの小学校の子供たちとは対照的だったと思います。その上、礼儀正しい私は先生のお気に入りだったので、すぐにいじめの対象となりました。

たった6歳の私でも、経済格差、目に見えないが確実に存在する国民間のバリアを感じざるを得ませんでした。ギリシャ人のコミュニティ、白人のキリスト教信者のコミュニティ、アジア人のコミュニティ、イタリア人のコミュニティ、黒人のコミュニティで構成されたサラダボウル社会でした。自分と同じ文化を持ち、同じ言語を話す人が集まるコミュニティに惹かれていました。6歳でも、いつかアメリカを出てもっと平等で個人として認めてもらえる包容力に満ちた環境に住みたいと本能的に感じとっていました。そして、移住してから約6か月後、母は私たちをイギリスに送り、叔母のもとで生活するという、3年にわたる人生の新しい幕が上がりました。

2年ほど前にイギリスに30年ぶりに戻りました。以前と今日のイギリスの姿は若干変わっていたものの、基本的な雰囲気は不変でした。幼児時代を過ごした近所のいろいろな場所にいとこたちが案内してくれた時、心温まる記憶が蘇えりました。

ニューヨークの生活で感じた毛穴から滲み出るような抑圧は、イギリスの生活では一度も感じませんでした。子どもだった私は実際



の社会情勢をよく理解していたわけではないでしょうが、私にとってロンドンは安全で愛情のある街に映りました。もちろんそれは叔父叔母が私たちをしっかり見守ってくれたことからそういった思いが持てたと思います

しかし、その実情は私の認識と大きく異なっていた点が多くありました。その当時のイギリス、特にロンドンは人種差別、貧困に起因する多くの社会問題を抱えていました。一番大きなアメリカとの違いは、イギリスでは凶器を持ち歩く行為がほとんど見られず、身の危険を感じなかったことです。

７０年代のイギリスもアメリカと同様に人種間の摩擦から生まれる様々な課題を抱えていました。イギリスの左翼を中心としたファシズムの再出現、黒人や外国人労働者に対する人種差別など、不安定な社会情勢が当時のロンドンなどの大都市の特徴の一つでした。

しかし、子供の目にはそのような社会が写ったわけもなく、当時のロンドンの暮らしはむしろアメリカに比べると、まるで天国のようなものでした。

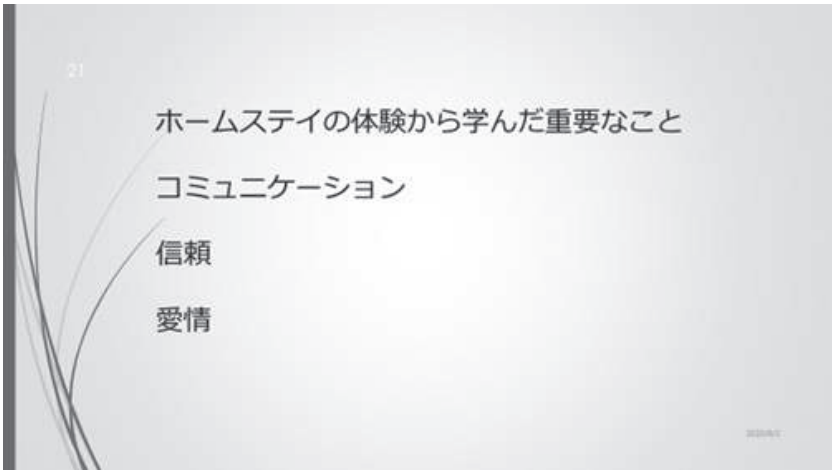
１９７６年。イギリスでの生活に幕をおろし、アメリカに帰ることになりました。３年前のアメリカと変わっていればいいなと思いながら帰りましたが、残念ながら、初渡米の印象は変わらず、カルチャーショックを克服しながら少しずつ生活になじむようになりました。小学校４年生から大学まで過ごしましたが、大学３年生の時に日本留学ができると知り、逃亡するような気分で初来日しました。

二　日本での体験

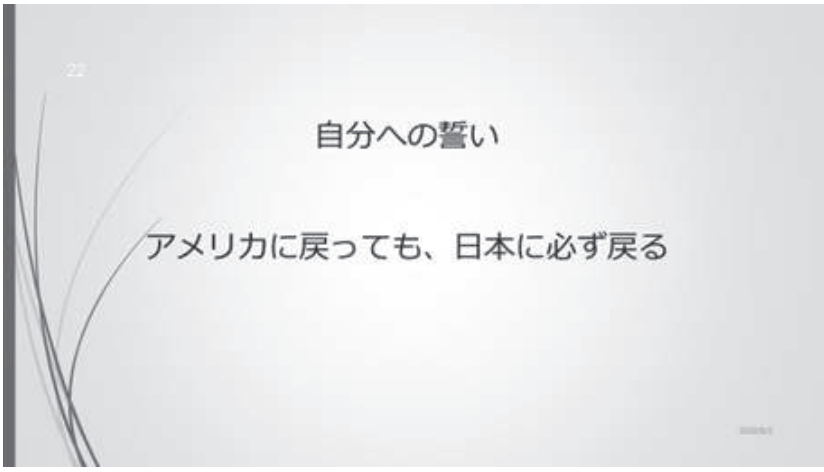
初来日のときは、できるだけ先入観を置いてきたつもりでしたが、いろんな意味でカルチャーショックを受けました。

まずは言葉です。日本に来る前に１年間日本語を勉強しましたので、日常会話はある程度できると思っていました。しかし実際来てみると、緊張のあまり、言葉を発することが全くできませんでした。空港から出て辺りを見回すと、当たり前のことですが、ネオンサインや看板の文字が全て日本語であることに驚きました。読むことも理解することもできず、言葉の壁にぶつかった瞬間でした。この体験で言葉の大切さを思い知らされました。また、日常生活の中で体験したこと、例えば電車やバスの駆け込み乗車であるとか、家が小さいことや密集していることに慣れるまで少し時間がかかりました。

私が住んでいたのは京都市内ではなく、京都市から３０分くらい南に下がった城陽市という所です。そのような環境の中で一番嬉しい発見だったのは、京都には結構優しい人が多いということでした。なぜなら、来日の前から京都人は冷たいと言い聞かされてきたからです。しかし、京都人が冷たいのではなく、京都の文化と歴史に誇りをもっており、そのプライドの高さが冷たさとして見られてしまうことが多いということでしょう。私が京都に１年間住んで学んだ



ことは、コミュニケーションの大切さ、同じ空間を共有し一緒に生活することから生まれるお互いへの理解や異文化に対する意識の改革の重要性です。異文化を持っていても交流を深めることができれば、お互いに分かち合えるだけでなく、それまでに抱いていた先入観なども取り払うことが可能となります。出会いは全てです。京都人、特にお世話になったホームステイ先の家族は素晴らしい人たちだと思うし、京都人と交流することができたおかげで、私が日本を心から愛するようになったわけです。ホームステイのアズマ家（仮称）からは、人生において貴重なレッスンを多く学ぶことができました。「寛容と人種や国籍を問わず他者を人間として尊重することの大切さ」などがそのほんの一部です。実は、アズマ家が私を受け入れるまでの経緯がありました。これはお兄さんから聞いた話ですが、当初アズマ家のお父さんは、特に黒人を受け入れることに抵抗があったようです。毎日聖書を読み、毎週教会に通う深い信仰を持つキリスト教信者のアズマ家でも、文化の違いなどに対応できるかなど、不安だったため断念しようと悩んでいた際、留学先大学の学生であったお兄さんがお父さんに言いました。「おやじは聖書の教えを思い出す必要があるのではないか。」その一言でお父さんを説得し、私を受け入れることになったそうです。



アズマ家と出会えて、非常に良かったと思います。その出会いによって、私は日本を愛することができたと思います。そして、コミュニケーションの大切さも覚えました。人間は人種とか肌の色からできたものではなく、生きてきた体験や環境からなるものだと深く信じるようになりました。

コミュニケーションの問題について言えば、私は当初日本語があまりできませんでした。自信がないため、情けないことに最初の一ヶ月は大学から戻ってきたらすぐに部屋に逃げこみ、日本語でのコミュニケーションをなるべく避けようとしていました。しかし、ある日、どんなに苦労していいので、分からないなりに分かるまでコミュニケーションが取れるようにならないと、と勇気をふり絞って、毎日お母さんと一緒に辞書を引きながら、コミュニケーションをとるように努力しました。次第にコミュニケーションが取れるようになり、色んな体験をすると、互いに心が開き、家族の一員として受け入れてもらうことができました。その寛大で寛容なアズマ家に大変感謝しています。上のお兄さんに大怪我を負わせてもその奥さんが私をハグして「大丈夫だから、安心して」と言ってくれたこと、下のお兄さんの結婚式の司会を頼まれたり、僕の結婚式も挙げてくれたり、先日の

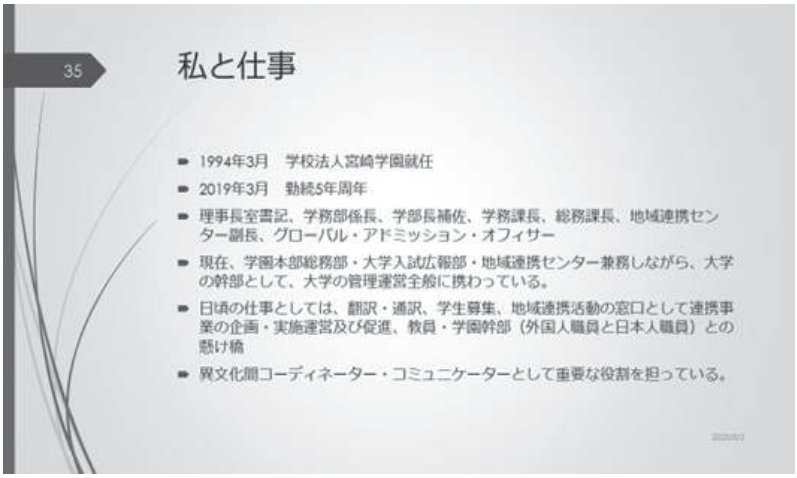
お父さんの米寿祝いに帰っておいでと連絡してくれたり、思い出すと心から溢れ出るほど多くの心温まることを一生忘れることはありません。心が通じ合うコミュニケーションから生まれた信頼と愛情を、今後も大切にしていきます。

そういったアズマ家と出会ったことによって、私はアメリカの大学に戻って卒業したら日本に帰ってくるぞと決心しました。僕の人生において最も大事な1年間でした。大変な体験もあれば、楽しい体験もたくさんありました。

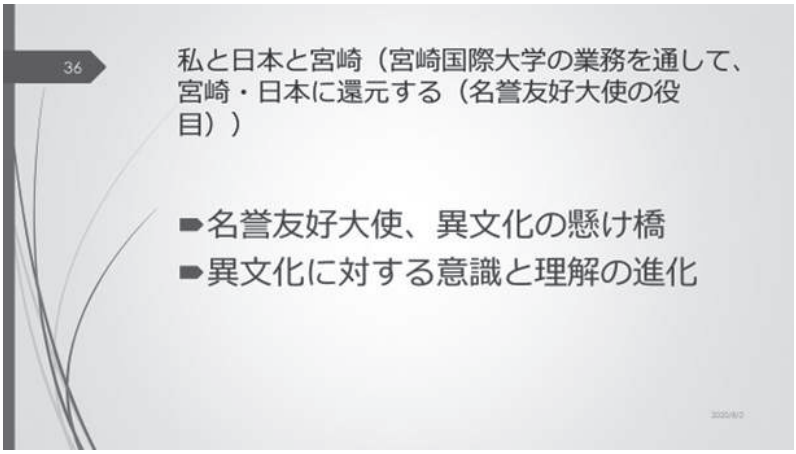
１９８８年の夏、同志社大学で勉強していた1年間が終了し、帰国する直前に友達から声をかけられ「純ちゃんの応援歌」というＮＨＫ連続テレビ小説に出演することができました。これも大変貴重な体験の記憶として深く刻まれています。特に、出演されていた有名な俳優の方々と交流ができ、日本の芸能界の在り方を少しわかったような気がしました。その中でも、山口智子さんの可愛さ純粋さは忘れられません。忙しくて疲れているのに私と一生懸命に会話していただき、撮影が終わった後も連絡を取り合いましょうと実家とご自身の連絡先を教えてくれて別れたのですが、残念なことにアメリカに帰ったら連絡先をすべて失くしてしまいました。もしかして私が旦那さんだったかもしれないな、と時々思い出しながら昔を懐かしんでいます。

三　宮崎人への進化

大学を卒業して2度目の来日から今に至るまでの間も様々な体験をしてきました。特に音楽に関しては、多様な舞台に立つことができたことに感謝しています。１９９３年に外国人歌謡大賞に出演し吉幾三の「雪国」を歌って受賞したこと、ＮＨＫのど自慢に挑戦したこと、宮崎のおやじバンドバトルで優勝したこと、そして宮崎県オペラ協会の「カルメン」や「ヘンゼルとグレーテル」等の舞台に出させていただいたこと、２６年間のバンド活動など、様々な形で音楽を通して仲間を作り、宮崎人としての存在を訴えってきました。また、２６年間の日常生活における同僚やコミュニティとの交



楽とバレーなどの趣味を通して作った仲間、自治会会長を２期も務めさせていただいたことなどによって、宮崎にしっかり馴染みました。自治会会長に選ばれたことは、近所の方々から深い信頼を得ていることの表れだと思います。そのことを深く受け止め、宮崎に今後も還元したいという気持ちが強いです。

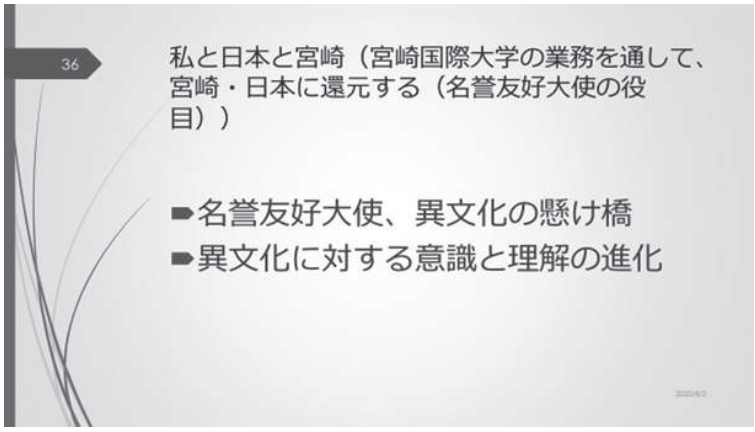


流と家庭ができたことにより私はすっかり宮崎市民として生活をしています。

娘たちは現在県外の大学に通っていますが、二人とも長く外国や県外にいても、宮崎には絶対帰ってきますと言っています。いろいろ体験しても最後は宮崎で生活したいと思っている娘たちの気持ちをすごく嬉しく思います。私自身も仕事や音

改めて自己紹介したいと思います。私はジャマイカ生まれ、イギリスとアメリカ育ち、国籍はアメリカですが、心は宮崎にあります。そのように私を見ていただけたら幸いです。今後ともよろしくお願いします。

四　宮崎と仕事及び宮崎の文化について



仕事を通して日本、宮崎、グローバル社会に貢献していきたいと考えています。そういう志をもって、１９９３年、面接を受けるためにはじめて宮崎に来た当時は正直なところ、宮崎の地名すら知りませんでした。宮崎を通り越して屋久島に一度は行ったことがありますが、宮崎に来たことはありませんでした。しかし、第一印象は衝撃的でした。「わっ、この景色…」宮崎ってきれいだなと思いました。空港から宮崎市内に走る２２０号線沿いのヤシの木の南国感や、１０月なのに暖かいし、人も温かくて、自然も豊かで、宮崎に来て良かったと今でも思います。

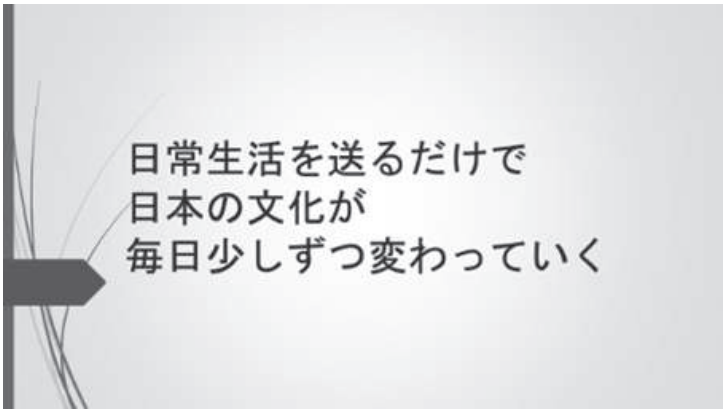
宮崎学園に就職して２６年目です。昨年度に勤続２５周年を迎えました。職務は理事長室書記、大学教務係、学部長補佐、教務課長、総務課長、地域連携センター副長、学生募集担当など、多岐にわたります。現在でも宮崎学園本部に所属しながら、学部長補佐として

大学の入試広報部と地域連携センターの仕事をしています。大学全般の管理に携わりながら、学生をいかに成長させるか、いかに教育できるかを常々念頭に置いて業務に取り組んでいます。

日頃色んなことをやっているのですが、私の仕事はどちらかというと異文化の懸け橋、異文化コミュニケーターという風に考えています。その役割は本学の教育環境や宮崎県の社会において大変大事なものであると考えます。

私が１９９２年に立命館大学国際関係学部の修士課程に進学したと同時に、京都府名誉友好大使という新しい奨学金制度ができました。採用された私たちは生涯にわたり友好大使としての役割を担っていきます。友好大使は自らの文化と京都や日本の文化を広く宣伝し、その文化への理解を深めることが役目です。友好大使同様に、学校法人宮崎学園と宮崎国際大学における役目も異文化の架け橋だと感じています。

作家ＢＪネブレット氏は、次のように述べています。「我々は私たちの経験の総計である。つまり、ポジティブなものであろうとネガティブなものであろうと、それらの経験は私たちのアイデンティティを確立させてくれるし、流れる川のようにそれらの経験や体験は私たちの現在の人間性そして今後の人間としての成長に大きく影響を与えるわけです。そして私たちは常に変わっていく。」ここではアイデンティティに焦点を当てていますが、実は文化も同じよう性質があると考えています。



日常生活を送るだけで日本の文化が少しずつ変わっていると感じます。皆さんもそう思ったことはありませんか？

僕が３３年前に日本に来た当時は、街を歩くと「えっ？マイケルジャクソン」とか「マイクタイソンだ」と指を差されながらよく言われました。今はそんなことはありませんが、当時はどうしてマイケルジャクソンやマイクタイソンと言われなくてはならないのかとうれしく思いませんでした。格好良くて世界のアイドルのマイケルジャクソンならいいけれども、マイクタイソンに似ていないし性格などが全く違うのに、なんで?と思ったこともありました。しかし、よく考えてみると、その当時黒人の文化に触れる機会というとメディアしかなかったわけです。映画・ニュース・スポーツ・音楽といった世界でのイメージが強く、当然子どもなどは私を見て、メディアに取り上げられている有名人を連想するでしょう。

そこで私が何をしたかというと、自分自身の文化・歴史や故郷の歴史などをしっかり勉強し、私の文化を日本人に説明し理解してもらうように努力することを決めたのです。

３０数年前と比較して、日本社会は大分変わってきたと思います。今年は残念ながらオリンピックが中止になりましたが、４年前のオリンピックではこういう場面がありました。陸上選手のウセインボルトとケンブリッジ飛鳥が競う場面です。それがなぜ興味深いかというと、同じジャマイカ人として、もちろんジャマイカ人のウセインボルトが勝って欲しいと思いましたが、それ以上に隣で走っている飛鳥氏が勝って欲しいという気持ちが強かったのです。なぜか。飛鳥氏はジャマイカの血を引いていると聞いており、二つの文化を持つ日本人がこのように世界の舞台で日本を代表して日本人として活躍していることが素晴らしいと思ったのです。もちろんこれまでも複数の文化を持つ日本人がいますが、私はそれまではそのような（ハーフではなく）ダブルの日本人をあまり意識していませんでした。この時に初めてあっと思いました。ダブルの日本人はもちろんこれまでもたくさんいます。ただしこの飛鳥氏のおかげで、日本の文化、日本の「顔」は今後少しずつ変化していくことを意識するようになりました。

日本で生活しているこの３０数年間で日本は確かに変わってきたと思います。日常生活の中でも文化が変化する要因がたくさんあります。例えば、買い物をしているとき、いろんなものを買いますが、日本で生産したものなのか、ブラジル、カンボジア、アメリカ、ベトナムなど、どこでできたものなのかを意識しながら買っている人はほぼいないと思います。しかし、様々な国で生産されたものを買ったり身に着けたり口に含んだりすることによって、それぞれの国の文化や経済、社会に影響を与えるし、私たち日本住民も影響を受けます。そういった意味では日常生活を送るだけでも私たちの文化が変化していくと言えます。

音楽でもそうです。ロック、R&B、J-POP、K-POP、クラシック、ジャズなど、様々なジャンルがあります。これらの音楽は互いに影響しあい、互いの進化に刺激を与えます。

また、情報社会ですから、ニュースを見るとき、情報番組を見るとき、インターネットを見るとき、いろんな情報を受けることによって、我々のモノの味方や世界観が変わっていくのです。

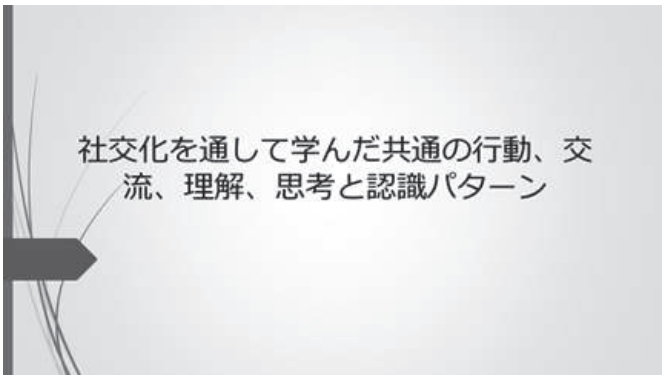
文化は上記のような要素により変わっていくものであるとすれば、当然日本と宮崎が今後どのように変わっていくかについて考えておく必要があります。

文化にはいくつかの要素があると言われています。まずは、同じ社交的な場で交流したりすることによって同じような理解が生まれ、同じような思考や認識パターンを共有しま

す。そして、ネブレット氏が述べるように、同じような体験をすることによって個人や集団としてのアイデンティティが確立されていきます。

例えば、私は日本に33年住んでいます。だからと言って私が日本人かというと、そうではありません。しかし、私のアイデンティティには、日本での体験からできた要素もたくさん含まれています。宮崎人だと考えることもあるし、日本人的な部分もあると考えています。

つまり、現代社会では異なる文化との交流を避けることができないとすれば、文化は絶えず進化するものであることを念頭に置きながら、社会に向き合う必要があるということです。今の宮崎を考えてみましょう。30数年前に日本に初めて来た当時、日本で生活している外国人の人口がどれくらいかは定かではありませんが、少なくとも26年ほど前の宮崎は、今ほど外国の人はいなかったはずです。外国人人口の増加の要因は様々ですが、異文化を有する住民が今後も増えていくと想定すれば、宮崎をはじめ日本社会もその増加に堪えうるだけの教育やインフラの整備など、様々な政策を考える必要が出てきます。



文化には、見えるものと見えないものがあります。見えるものには、例えば制服や伝統衣装、食べ物や祭りであるとか、実際身に付けたり、物理的に存在し触れることができるものが目に見える文化です。一方、目に見えない文化には価値観や考え方、言葉や社交的行動などがあります。この見えない文化が最も複雑で深いであり、今後のグローバル社会において私たちが深く理解し、十分に対応できるように準備する必要があると思います。

例えば、コミュニケーションスタイル。中国人はなぜこのようなコミュニケーションをとるのか、なぜ私の発言や態度によって中国人の反応が攻撃的になるのか。アメリカ人は何故すぐにハグしようとするのか、○○文化ではなぜ右手だけで食べるのか。ボディランゲージをどうすれば正確に読めるのか、相手の宗教にどう対応するのか。日本は無宗教だと言われますが、今後イスラム系の住民が増えていくでしょうし、カトリック系などの人も移住してきます。そのことによって食文化も多様になっていくでしょうし、様々な場面で宗教への対応が進化していくと思われます。これまでの例だけでも、目に見えない文化がいかに大事かよく分かると思います。

五　宮崎と日本に対する希望と期待

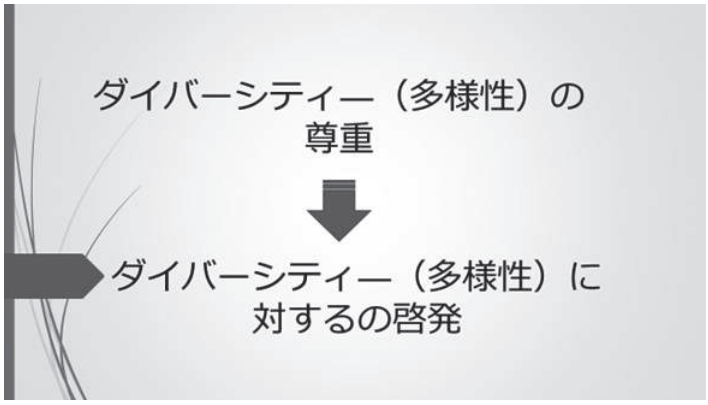
日本が今後変わっていくのは間違いないです。将来的には私たちのような家族が増えていくでしょうし、外国人労働者も多く移住してくるでしょう。

その時には多くの社会問題が発生する可能性が出てきます。様々な文化の違いから生まれる摩擦を解消しながら、我々は異文化と共存していきます。しかし、日本はこの避けて通れない現実をどういう風に受け止めて準備していくのか、目に見えない文化にどのように対応していくのか、早急に考える必要があると思います。

宮崎もこのような課題にどのように対応していくのかが大変興味深いです。約半年前のことですが、ある地方都市の市長の講演を聴く機会がありました。質疑応答の際に、今後見込まれる外国人労働者の増加に伴って必要となる病院や教育機関や福祉機関等のインフラの整備をどのように考えているのですかと尋ねてみたところ、市長が立ち止まったわけです。ほとんど考えていないことが分かりました。言葉（日本語能力）だけでも教育、医療、福祉など、様々な場面においてコミュニケーションが大きな課題となると想定できます。他国から労働者を受け入れるのはいいのですが、受け入れ態勢がしっかりとできているのか、そして受け入れてからの地域社会での生活をどうすれば保障できるかを真剣に検討する必要があると思われます。

六　コロナ・少子高齢化・グローバル化に対応する日本と宮崎の将来への展望

少子高齢化のような社会現象から複雑な課題が出てきます。外国人と日本人との共生、私の娘たちのように２つ以上の文化を持つ人の増加、帰化する外国人など、多様な価値観を持つ人を尊重できる環境をどのように創っていくのかなど、様々な課題への解決策を考えなければなりません。多様性豊かな現代社会だからこそ、ダイバーシティー（多様性）を尊重する態度を啓発する教育を促進しなければなりません。



私はジャマイカで生まれましたが、イギリスで育って、現在国籍がアメリカであるけれども、心は宮崎にあるという風に自己紹介するのは、意味があります。それは私自身あるいは私の家族のように多様なバックグラウンドのある人が今後の社会の模範のひとつになるのではないかと思うからです。

世界各地で浮き彫りになった多様性に関わる問題は、幸いにも日本ではまだそれほど発生していませんが、今後多文化していく日本

社会において、十分発生していく可能性はあると思います。

１９８０年から２０１４年までの間日本に入国した外国人は約１０倍以上増加したとの統計が出ています。外国人人口が今後さらに増えていくことにより発生することが想定できる課題への対応策は、外国人を受け入れるために必要なインフラを整備し、多様性に寛容な社会づくりと子育てを促進することが得策であると考えます。

今、コロナの時代ではありますが、コロナだからこそ私は、子どもが自己と家族を愛し、他者を思いやって社会のルールを守りながら世界で活躍できる人間に育っていかなければならないと思います。そのような子どもを育てる環境を作るのは、私たち親の責任です。多様な社会にしっかりと向き合う健全な育成は、家庭教育を礎に、学校教育を含めて地域社会の様々な側面から考えて取り組んでいく必要があります。

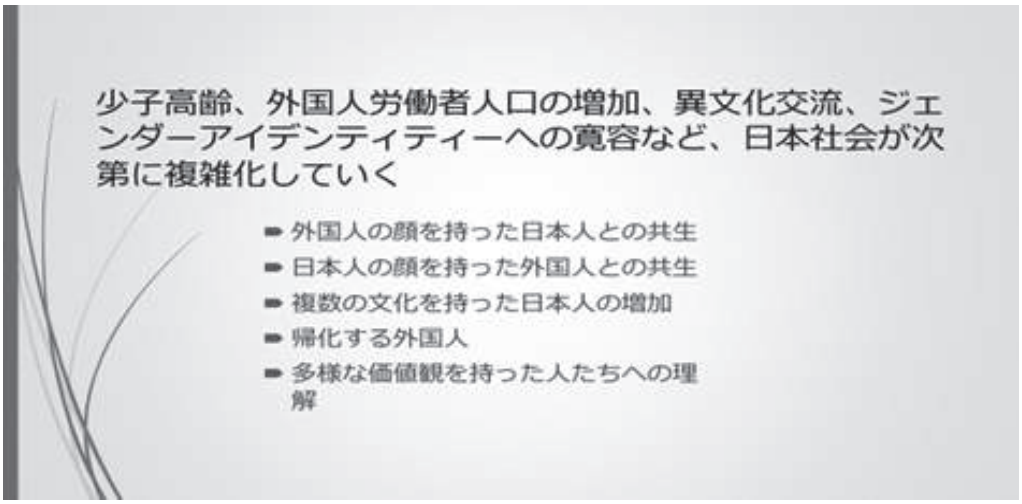
先ほど紹介しましたネブレット氏が述べるように、私たちの体験や経験は本当に私たちの総計であり、私たちのアイデンティティを確立させてくれるのであれば、これからの日本のアイデンティティも変化していくでしょう。その変化がポジティブなものなのかネガティブなものなのかは私たち次第だと思います。

私の宮崎人への進化の最大の要因は、おそらく私の家族にあると思います。日本で生活し家族を作り、その家族がアメリカ人とジャマイカ人の文化を備わっている日本人として今から日本で暮らしていくでしょう。

しかし、実を言うと私の先祖にはアフリカ、スコットランド、インド、シリアなど、様々な文化を持っている人がいます。娘たちはそれらの文化を受け継いでいるわけです。豊かな文化とＤＮＡを誇る娘のようなダブルやトリプルの若者がこれからの日本を担っていくわけですが、そのような若者こそが宮崎のみならず、日本全体のグローバル化の鍵のひとつではないかと確信しています。

今後のグローバルな宮崎を実現するためには何が必要かを考えていかなくてはならない時代やってきました。本日のようにこの課題を一緒に考える機会をいただき大変光栄に思います。

私は、今後も仕事や社会活動において、宮崎のグローバルな未来を目指して活動していきます。愛する娘のために、愛する宮崎と日



本のために。

話は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

これまでの２６年、そしてこれからのさらなる宮崎人への進化を温かく見守っていただいている皆様に感謝しております。

２０２０年８月２日

オペラ『赤毛のアン』の実現に向けて

宮崎県オペラ協会相談役
初演オペラ『赤毛のアン』上演実行委員長
見山　靖代

目次

はじめに
1　宮崎県オペラ協会のあゆみ
2　新たな挑戦
3　実現への第一歩
4　失敗と挫折
5　オペラ『赤毛のアン』オペラ化に吉報
6　契約書締結
7　契約文書について
8　世界初　オペラ『赤毛のアン』制作に向けて
9　上演成功のための組織づくり
10　アマチュア団体の財政事情
11　ケイトさんとイライザさんようこそ宮崎へ
12　第二十二回　世界初演オペラ『赤毛のアン』公演
13　オペラ『赤毛のアン』の社会的評価

はじめに～モンゴメリとアンのふるさと　プリンス・エドワード島を訪ねて

【旅の目的】

①「赤毛のアン」の舞台をめぐる

②ケイト・マグドナルド・バトラーさんを表敬訪問する

（『赤毛のアン』の作者Ｌ・Ｍ・モンゴメリの孫娘。相続人会社代表）

③ジョージ・キャンベルさんを表敬訪問する

（契約の恩人、銀の森屋敷のご主人、相続人会社のメンバー）

２０１６年６月１日から約１週間「松本侑子さんと行くカナダプリンス・エドワード島ツアー」に参加した。宮崎から私たち夫婦と義妹の小田夫婦４人が同行した。一行39名。松本さんはツアーの案内者であり「赤毛のアン」の翻訳者でもある。彼女の計らいで、全ての目的が叶い有意義な旅となった。松本さんと同行のみなさんに、心から感謝したい。

孤児アンが期待と不安を胸に、ブライト・リバー駅に降り立ったのも同じ６月。島は長い冬眠から醒めたばかりの春爛漫。草原の緑が目に染みた。満開のさくら。咲き乱れる白い林檎の花。100年前の小説さながらの風情に感動。光と新鮮な空気、植物の香りを身体一杯に浴びた。アンが世界一美しいと言ったプリンス・エドワード島はＬ・Ｍ・モンゴメリの生まれ故郷であり，小説の主人公アン・シャーリーの故郷。彼女の息づかいが感じられる。島民は「Anne of green Gables」という文化遺産に誇りを持ち、穏やかに共存共栄していた。

「赤毛のアン」の舞台めぐり（松本さんの解説付き）

～キンドレット・スピリッツ・カントリーに三泊（グリーン・ゲイブルズまで徒歩３分）

＊グリーンゲイブルズ　＊モンゴメリのお墓　＊郵便局

＊教会　＊モンゴメリ家跡　＊恋人たちの小径

＊お化けの森　＊ブライトリバー駅舎

＊キャベンディシュビーチ　＊モンゴメリ生家

＊銀の森屋敷（赤毛のアン博物館）　＊輝く湖水

＊コンフェデレーション橋　＊墓地公園

美味しい地どれの食材（量の多さにびっくり）

＊ロブスター　＊ムール貝　＊生牡蠣　＊ワイン

＊ジャム　＊アイスクリームｅｔｃ

《表敬訪問》

＊ケイト・マグドナルド・バトラーさんとサリー弁護士

トロント空港～バスで45分、北西部のノーヴァルへ向かった。モンゴメリの夫ユーアンが牧会した教会。ケイトさんと弁護士のサリーさん（文書のやりとり相手）にお会いした。ケイトさんは祭壇上で歓迎のメッセージ。10名くらいの信者さん達がお友達だった。初めての表敬訪問は、心温まる一日だった。

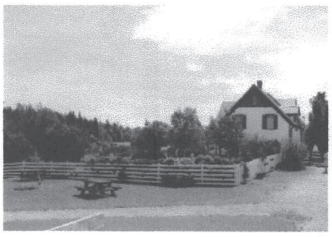
＊ジョージ・キャンベルさんと妹のパム・キャンベルさん

銀の森屋敷でお会いした。育ての親マシュー、マリラ兄妹を彷彿とさせるお二人であった。私たちはモンゴメリが結婚式を挙げた客間に通され、そこにあった古い足踏みオルガンを、見山冨士夫が弾き、日本の歌『故郷』をみんなで合唱した。パムさんは涙を流して喜ばれた。広い農場で、作業着姿のキャンベルさんが出迎えてくださった。まるでマシューのような優しい笑顔。ほどなくパムさんも屋敷から出てこられしばし談笑。緊張もすっかりほぐれた。

１　宮崎県オペラ協会のあゆみ

（１）宮崎県オペラ協会の本公演

宮崎県オペラ協会は１９７２年創立。内外の古今名作のオペラやオリジナルオペラに精一杯取り組んだ。本公演22回開催。全国に400



グリーン・ゲーブルズ

ケイト代表・サリー弁護士と

ケイトさんの歓迎の言葉

満開のリンゴ園

ジョージ・キャンベルさんと

パム・キャンベルさんと

海岸公園で仲間たちと

赤土の道

ブライトリバー駅舎

恋人たちの小径

ロブスター

デザート

画像：宮崎県オペラ協会提供

を超えるオペラ団体がある中で、宮崎県オペラ協会の評価は高い。

【本公演演目】

第1回「魔笛」（1973年）　演出／吉富堅二郎
旗揚げ公演は、未熟ながらも大成功

第2回「カルメン」（1975年）　演出／工藤智昭
オペラ演目中世界一番人気の作品。お客様も大喜び

第3回「あまんじゃくとうりこひめ」「バスティアンとバスティエンヌ」（1976年）　演出／工藤智昭
オペラ創りのノウハウを学んだ

第4回「鶴富二幕」（1979年）　演出／佐藤信　作曲／林光
日本を代表する二人　佐藤信／林光との衝撃的な出会い。森永国男会長の功績大。最後の章の楽譜は1週間前に届く。

第5回「河童譚」「安寿と厨子王」（1982年）
小作品を県立博物館ホールで開催　初心にかえって勉強

第6回「愛の妙薬」（1983年）　演出／橘　市郎
橘市郎演出は舞台にバルーンが飛び、舞台空間の可能性に目覚めた。お客様に喜ばれた。

第8回「カルメン」（1985年）　演出／松永　健
聞かせどころを得ているビゼーの音楽　物語がドラマティック
観客を飽きさせない

第9回「ヘンゼルとグレーテル」（1987年）　演出／末平浩康
末平浩康演出は、ヘングレの公演の教科書として定着
大好評に付き急遽追加公演

第10回「白いけものの伝説＝鶴富」（1988年）
題名の変更。NHK衛星放送で全国に放映された

第11回「ヘンゼルとグレーテル」（1990年）　演出／地村俊政

第12回「ヘンゼルとグレーテル」（1991年）　演出／末平浩康
オペラ協会人気の演目として学校公演でのリクエスト多し

第13回「魔笛」（1992年）　演出／見山靖代
出演者の子どもたちが大勢パパゲーノとパパゲーナの子どもで出演。第2世代の成長が楽しみ

第14回「炎の姫＝此花開耶姫へのオマージュ」（1994年）　台本／古垣隆雄　作曲／金田雄志　演出／末平浩康・地村俊政
台本・作曲・演出すべて宮崎人によるオペラを完成

第15回「遠い海の記憶＝海幸・山幸」（1997年）　台本／実宏健士　作曲／金田雄志　演出／見山靖代
音楽は超現代曲。歌い手は音取りに苦労した。加納雄一衣装デザインの独創性に注目。今では着ぐるみでは世界的。宮崎神話を県民に親しんでもらう音楽は？

第16回「ヘンゼルとグレーテル」（1999年）　演出／見山靖代
清武文化会館で。照明の是永真一さん遺作となった。

第17回「カヴァレリア・ルスティカーナ」（2002年）　演出／見山靖代
着任早々の県劇青木賢児館長（前NHK交響楽団理事長、宮崎国際音楽祭創設者）から「宮崎のオペラのレベルは高いね」

第18回「コシ・ファン・トゥッテ」（2003年）　演出／見山靖代
出演者・観客ともにオペラブッファの楽しさを味わった
テノール粟飯原敏文さん客演（土田浩さんの義兄弟）

第19回「鬼八＝鬼棲む里の伝説」（2004年）

台本／高山文彦　作曲／池辺晋一郎　演出／中村真理

高千穂出身大宅賞作家高山文彦の初めての台本は「自然と人間の調和」いつの時代にも不変の理。素晴らしい台本に感動。池辺先生の音楽は印象に残る。

第20回「カルメン」　演出／倉迫康史

娼婦と少女　情熱と孤独　二人のカルメン　二つの結末

倉迫演出の視点がユニーク

第21回「鬼八＝鬼棲む里の伝説」（２０１５年）　演出／宇井幸司

演出者が変わると舞台も変わる　池辺先生のご推薦

第22回　世界初演『赤毛のアン』（２０１８年）

翻訳／松本侑子　台本演出／倉迫康史　作曲／佐橋俊彦

初めて世界名作小説のオペラ化に取り組む。

＊子どもから大人まで楽しめるオペラ

＊メロディックで口ずさめるオペラ

＊親しまれるオペラ

ライセンス取得には時間はかかったが、契約に至るまでの人と人との絆の大切さを学んだ。オペラは時代を超え国境を越え・心の壁を越えて多くの人々の心を魅了。繰り返し演奏されることで成長してきた。大衆性と芸術性は相反するものではないと考える。

オペラ『赤毛のアン』の生命力を信じる

オペラ『赤毛のアン』は宮崎県オペラ協会の誇り

（2）宮崎県オペラ協会の事業

＊宮崎県新人演奏会30回以上＊学校公演150校以上

＊宮崎市文化連盟主催「春の音楽祭」毎年出演

＊宮崎市文化連盟主催第九「合唱」のソリスト、合唱で参加

＊全日本オペラフェスティバルに出演して交流

＊全国オペラフォーラムに出席

＊他団体との共演（宮崎シティフィル等）

＊ニューイヤーオペラコンサート

＊ふるさとファミリー劇場

＊伊達バレエ団主催「ドラマティック古事記」に賛助出演

＊宮崎市民文化ホール開館記念「市民コンサート」出演etc

オペラ協会は、オペラの楽しさを多くの人に知ってほしいと考えている。学校公演は子どもたちの喜ぶ姿が励みになる。宮崎県新人演奏会は、若い音楽家達の登竜門。さらに協会にとっては新人発掘のチャンス。ふるさとファミリー劇場では積極的に地方に出かけ地元の方々と交流した。子どもから大人までオペラに興味を持ってもらうために、演目選びには気を配っている。「オ・ペ・ラ？」「お・て・ら？」・「歌うオペラです」…も今は昔噺。

宮崎の地に、徐々にオペラが浸透しつつあることを実感している。

（3）受賞歴

＊大臣表彰地方文化功労賞

＊宮崎県芸術文化団体連盟　芸術文化賞

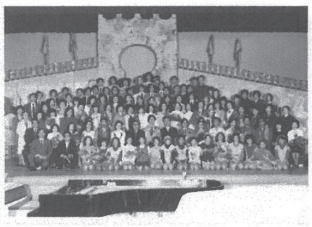
＊宮崎銀行ふるさと文化振興基金助成受賞

＊三菱ＵＦＪ信託銀行　佐川吉男音楽賞　奨励賞

＊オペラ『赤毛のアン』で再び、宮崎日日新聞文化賞

評価されることは嬉しい。

オペラの舞台は建築と同じ。創り上げていく過程が面白い。



カルメン

あまんじゃくとうりこひめ

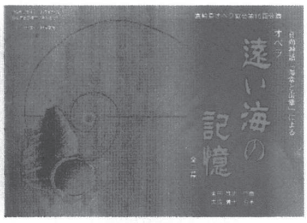
鶴富

ヘンゼルとグレーテル

カヴァレディア・ルスティカーナ

魔笛

炎の姫



遠い海の記憶

コシ・ファン・トゥッテ

鬼八～鬼棲む森の伝説

カルメン

オペラ『赤毛のアン』

画像：宮崎県オペラ協会提供

画像：宮崎県オペラ協会提供

宮崎日日新聞社掲載　2011（平成23）年　9月2日付　11面

画像：宮崎県オペラ協会提供　　宮崎日日新聞社掲載　2016（平成28）年　9月24日付　23面

宮崎日日新聞社掲載　2018（平成30）年　10月27日付　1面

2　新たな挑戦

（1）宮崎県オペラ協会創立40周年事業

２００８年４月の総会で「創立40周年記念事業」として、カナダの女流作家Ｌ・Ｍ・モンゴメリ原作「赤毛のアン」のオペラ化を決定。協会にとっては、５作目の新作オペラとなる。古代から現代へ、大河ドラマからホームドラマへ。新たな時代の幕開け、新しい挑戦の始まりである。

（2）気鋭の芸術家～松本侑子さん　倉迫康史さん

佐橋俊彦さん

ア松本侑子さん（翻訳家、小説家）

①日本初全文訳

②学術的な訳注付きで物語の背景が理解しやすい

③児童書でなく、純文学的名作ととらえた

④プリンス・エドワード島の生き字引

⑤美しい日本語で翻訳されている

イ倉迫康史さん（舞台演出家　たちかわ創造舎チーフディレクター）

①宮澤賢治作「ポラーノの広場」の演出に感動

②役者の身体表現能力を発揮させる抜群の指導力

③舞台のセンスの良さ

④多彩かつ豊富な舞台演出経験

⑤宮崎市出身

ウ佐橋俊彦さん（作編曲家＝アニメ、ミュージカル、劇音楽、映画）

①ＮＨＫ朝ドラ「ちりとてちん」の音楽に感動

②ジャンルにとらわれない自在な表現力

③根底にクラシカルな音楽が流れる品の良さ

④オペラの核は「ポップでお洒落で哀しい」に共感

⑤ルーツは宮崎　都城出身声楽家岡崎実俊氏の子息

この三人の方々との出会いから、新しいオペラが誕生する。

3　実現の第一歩

（1）シンポジウムと試演会

～名作「赤毛のアン」の魅力とオペラ化への挑戦

日時　２０１１年８月２５日（木）１９：００～

場所　宮崎市民プラザ　オルブライトホール

主催　宮崎県オペラ協会（宮崎市文化振興基金事業）

《第一部　お話し》

①はじめに　　司会進行　末平浩康（協会理事長）

②世界名作「赤毛のアン」のオペラ化　見山靖代（協会会長）

子育て・地域社会・学校教育の現場で問題点が網羅されている。

～大河ドラマからホームドラマへ

③「赤毛のアン」の台本化　倉橋康史（舞台演出家）

～名作小説からオペラ台本を生み出す困難さ

家族劇と群像劇の２重構造

④オペラ『赤毛のアン』　佐橋俊彦（作編曲家）

～初めてのオペラ作曲に心躍る。

「オペラはこの世で最高の芸術形態」と信じている。

⑤出演者の立場から　泊かずよ（協会制作局長）

～カルメンからマリラへ　役者としての面白さ

⑥クロストーク

倉迫・佐橋両氏は東京在住。意気投合して作業がはかどった。台本家・作曲家のこのような関係は理想的。

⑦質疑応答

会場からは21世紀の期待が寄せられた。観客の好反応に出演者共々、明るい未来を確信する。

《第2部　オペラ『赤毛のアン』演奏会形式による抜粋演奏》

指揮／土田浩　ピアノ／土田悦子　本田麻奈美
案内役リンド夫人／森田祐子

〈第1幕〉

①マシューが馬車に乗ってる　村人たち／パスティアポプリ&協会
②歓びの白い路　アン／河野敦子
③その子は誰、男の子はどこに　マリラ／泊かずよ
　アン／河野敦子　マシュー／西澤拓哉
④わしらがあの子の役に　マリラ／泊かずよ
　マシュー／西澤拓哉
⑤アン、リンド夫人だよ　リンド夫人／森田祐子
　アン／河野敦子　マリラ／泊かずよ
⑥あなたがダイアナ？　アン／宮田かおり
　ダイアナ／友納真美
⑦わしらがあの子の役に　マシュー／末平浩康
　マリラ／泊かずよ

〈第2幕〉

⑧皆さんおはよう　フィリップス先生／西澤拓哉
　アン／黒木あすか　ダイアナ／宮田かおり
　ギルバート／伊與田安武　ルビー／安部まり
　ソフィア／宮田かおり
⑨悔やんでも悔やみきれない　ギルバード／柳田哲志
⑩私たちはだんだん大人に　ダイアナ／黒木あすか
⑪わしは年を取っただけ　マシュー／末平浩康
　アン／河野敦子
⑫やがて夜の静寂が　村人たち／パスティアポプリ&協会合唱
　アン／河野敦子
⑬そんなに泣くのはおよし　マリラ／泊かずよ
　アン／河野敦子
⑭その必要はないよ　ギルバード／柳田哲志
⑮風は桜の木を揺らし　村人たち／パスティアポプリ&協会合唱

物語を大事にしながら、舞台構成も要所をとらえてよどみない。言葉が美しく流れる・音楽が爽やかで、躍動するテンポ感に体が素直に反応する。観客も楽しめる。

（2）講演「赤毛のアンの愛と文学」
～オペラ『赤毛のアン』によせて

日時　2011年8月27日（土）14時～16時
会場　宮崎市中央公民館　大研修室
主催　宮崎県オペラ協会　宮崎市文化振興基金事業
講師　松本侑子さん（作家・翻訳家／日本ペンクラブ常任理事）

会場には約50人ほどの「赤毛のアン」ファン。女性が断然多い。松本さんは多彩な顔を持っておられるが、まるで彼女の一人芝居の役者を見ているよう。その場面が想像され惹き込まれる。

講演内容

「赤毛のアン」の舞台は19世紀末のカナダ東海岸にあるプリンス・エドワード島。そこで農業を営んでいるマシューとマリラの兄妹が孤児院から引き取ることになったのが主人公のアン・シャーリー。彼女を取り巻く少年少女の成長と周囲の大人の成熟を描いた愛の物語。この物語は児童書ではなく、L・M・モンゴメリの英米文学の知識や聖書（約100カ所引用）の影響が強く、知的で哲学的な文学作品。登場人物の名前とキリスト教との関係も、意味があり興味深い。さらに、シェイクスピア劇「ロメオとジュリエット」からの引用も多い。夢想的なアンの何気ないおしゃべりにも、

随所にシェイクスピア劇の一節が盛り込められている。
《薔薇はたとえばどんな名前で呼ばれても甘く香るであろう》
《過去は忘却のマントで覆い隠そう》等々
それにしても、松本さんの知的好奇心は凄い!!
美しいプリンス・エドワーズ島の写真も、興味をそそられる。彼女の案内でぜひ訪れてみたい。（夢はかなった）
（２０１６年６月１日～７日ツアーに参加して実現）

４　失敗と挫折

（１）the Anne of Gables Licensing Authority Inc. 以下（ＡＧＧＬＡと略）の存在

翻訳者松本侑子さんから、小説「赤毛のアン」をオペラ化するには、カナダのＡＧＧＬＡ（ライセンス局）に許認可申請をする必要があるとのご指摘あり。ＡＧＧＬＡの存在について認識していなかったことは、迂闊であった。このまま企画を続行していれば、裁判沙汰にもなりかねないところ。松本さんに救われた。

（２）ＡＧＧＬＡへオペラ「赤毛のアン」の舞台制作上演権の申請

第１回目　２０１０年５月17日　申請
（宮崎県オペラ協会の紹介と企画書、申請書）
　２０１０年11月25日　却下
第２回目　２０１０年11月30日　申請
（契約金２０００ドルの用意がある）
２０１０年11月30日　却下
第３回目　２０１０年12月13日　申請
（オペラ化への強い意志の表明）
　２０１０年12月22日　却下

【却下の理由】
①カナダでのミュージカル「赤毛のアン」の作者ドナルド・ハーロン、ノーマン・キャンベルと独占契約をしている。
②相続人の大半が賛同していない
③２０１２年にミュージカル「赤毛のアン」を日本で上演するので、混同の恐れがある（劇団四季公演）

宮崎県オペラ協会の申請は、３回とも却下された

（３）倉迫康史さん　佐橋俊彦さんオーディション審査のため来宮。舞台制作上演権未取得について話す。

予定通り２０１０年１２月２６日、審査員として両氏来宮。２０１２年９月１日／２日公演のオーディションを行った。オーディションは地元協会は勿論、東京やドイツに留学している人も応募して盛会であった。終了後、ライセンスが取得できていないことを、率直にお話しした。佐橋さんのお顔がプロとしての厳しい表情に変わった。直ちに以下のことを申し渡されお帰りになった。

①ライセンスがない作品の発表は、作曲家としてのプライドが許さない。今後の創作活動に著しく支障をきたす。
②オペラ『赤毛のアン』の楽譜使用禁止
③公演差し止め
④今後のことは、顧問弁護士長谷川拓也氏に託す。

倉迫・佐橋両氏のオペラ『赤毛のアン』は、必ず舞台制作上演権を獲得して一点の曇りもない状態で発表することを心に誓った。

（４）オペラ協会『赤毛のアン』公演延期新聞紙上で発表

２０１２年３月１９日付け　宮日新聞紙上で
宮崎県オペラ協会主催　２０１２年９月１日／２公演予定のオペラ『赤毛のアン』は、諸般の事情により、２０１３年以降に延期することになりました。公演が近づきましたら、改めてお知らせいたします。
倉迫・佐橋両氏の無念は宮崎県オペラ協会の無念。

オペラ『赤毛のアン』の舞台制作実現の夢は続く。

（5）契約社会で生きる

「契約とは、目的や条件を決めて約束すること。一定の事項につき2人以上の当事者の合意によって成立する法律行為」と辞書には記されている。ＡＧＧＬＡと宮崎県オペラ協会との合意を形成するためには、如何にすべきか？模索は続くＡＧＧＬＡとの関係の糸口を求めて、趣旨書・企画書を持って、下記の所にアタックした。

＊文科省著作権課（そのような案件は扱っていない）

＊カナダ大使館（反応なし）

＊カナダ大使館関係者（進展見られず）

経産省ＯＢ、宮崎県出身の経済産業省現職官僚

日本著作権協会（それは不可能ですと言下断られた）

＊劇団エンジェル（２０１２年7月27日全労済ホール）公演。劇団の「赤毛のアン」を観劇後、代表／演出家高倉亜希子氏にライセンス取得の経緯を伺う。日本の舞台関係でライセンスを持っているのは、この劇団と劇団四季のみ。

＊ソプラノ歌手中丸三千絵さんにも宮崎で公演時にお願いした。

＊長谷川卓也弁護士

法的解釈・作曲家の尊厳等ご助言いただいた。やはり契約は私たちの問題。

ライセンス獲得はなかなか手強い。

5　オペラ『赤毛のアン』オペラ化に吉報

～奇跡の舞台制作上演権獲得

（1）２０１４年10月19日プリンス・エドワード島から帰国したばかりの松本侑子さんから電話が入った。

ＡＧＧＬＡの相続人メンバーの一人で、「赤毛のアン博物館」（銀の森屋敷）のオーナーでもあるジョージ・キャンベルさんから、「宮崎県オペラ協会から何度も申請書が提出されていたが、その後、協会と彼女はどうしているかね？」とのこと。

「ＡＧＧＬＡは、２０１４年10月25日からクリスマス休暇に入るので、その前に大至急もう一度申請書を提出されてはどうですか…」と松本侑子さんからの電話だった。

（2）「まるで天の声　ありがとうございます!!」

「これはチャンス!!申請書を提出しなければ」宮崎国際大学のロイド・ウォーカーさんに事情をお話しし、ＡＧＧＬＡへ大至急メールしてくださるようにお願いした。

10月23日　彼の翻訳で４度目の申請書を送信完了

（3）２０１４年12月19日、ＡＧＧＬＡから舞台制作上演許可

「宮崎県オペラ協会に限って、オペラ化を許可する」

松本侑子さんは、通訳者としてプリンス・エドワード島を訪れる度に、ＡＧＧＬＡを説得。彼女のプリンス・エドワード島への永年に亘る貢献度と広い人脈。キャンベルさんの相続人とメンバーとしての善意と勇気。我々の３回申請書提出。諸々の情熱・熱意が、ＡＧＧＬＡのメンバーの心の扉を開かせた。

カナダと日本の国境を越えて奇跡が起こった。

「赤毛のアン」オペラ化実現への道筋が整った。

6　契約書締結～２０１５年４月17日

ＡＧＧＬＡ　マグドナルド・ケイト・バトラー代表と

宮崎県オペラ協会会長　見山靖代は契約書にサイン

宮崎県オペラ協会制作　世界初演オペラ『赤毛のアン』はライセンス（特許権）を持つオペラ作品であると証明された。

２０１５年４月17日調印まで丸５年の歳月を要した。

「継続は前進なり」を実感した。

7　契約文書について

契約文書は15項目から成り立っている。念のため３人の方々に翻訳依頼。３人とも、「宮崎県オペラ協会の実情を踏まえた、非常に好意的な内容である」と言われた。念のため、宮崎の弁護士さんにも見て頂いたが、「通常の契約書より、縛りの少ない緩やかなもの」であると。しかも契約金550ドルには驚いた。善意を持って我々に対処してくださったことがうかがえる。感謝である。これで長いこと御迷惑をおかけしていた、倉迫・佐橋両先生にもご報告できる。

Ｌ・Ｍ・モンゴメリの相続人は宮崎県オペラ協会が、２０１５年３月から２０２０年３月までの５年間、「赤毛のアン」の文学作品を日本語のオペラ作品として制作し、様々な場面で演奏することを許可します。

相続会社代表　ケイト・マグドナルド・バトラー

8　世界初　オペラ『赤毛のアン』制作に向けて

（1）オペラ『赤毛のアン』発会式

２０１６年９月22日（秋分の日）宮崎市民プラザ大研修室

オペラ協会員、パスティアポプリ、関係者約50名参加

①開会のことば　司会　泊かずよ

②オープニングコーラス「マシューが馬車に乗ってる」

オペラ協会＆パスティアポプリ

③会長挨拶　地村俊政　④名誉会長　見山靖代

⑤台本演出　倉迫康史　⑥作曲　佐橋俊彦

⑦質疑応答　⑧コーラス「風は桜の木を揺らし」

オペラ協会＆パスティアポプリ

⑨記念撮影　閉会

（2）初めての記者会見（宮崎県庁）

～２０１６年９月23日

～オペラ『赤毛のアン』公演をアピールする。

宮崎日日新聞　読売新聞　ＭＲＴ　ＵＭＫ　西日本新聞取材

地村会長　倉迫演出　森田　泊　見山出席

＊宮崎県オペラ協会地村会長よりオペラ『赤毛のアン』上演の概要が発表された

＊倉迫康史さんから『赤毛のアン』はファンが多い作品で気合いが入っている。クラシカルな要素を基本に21世紀にふさわしい舞台にするため最新の技術も採用したい。

＊名誉会長の見山は「アンがたくましく生きる姿を、世代を超えた多くの人に見てもらいたい」と語る。

9　上演成功のための組織づくり

～倉迫・佐橋提案を受けて

（1）２本立て組織結成

その一　舞台創造のためのオペラ協会（地村会長が統括）

＊歌手60名で舞台づくりに専念する。

＊週２回の練習（水・土）

＊台本・楽譜の大幅な改訂の確認

＊公演までのスケジュール

①２０１６年11月27日　出演者のための説明会

②２０１７年２月11日・12日倉迫・佐橋によるワークショップ

③２０１７年５月28日オーディション

④２０１８年８月25日／26日　本番３公演

その二　興行推進のための上演実行委員会（見山委員長）

＊副委員長古垣隆雄（オペラ協会員）毎月一回例会

委員25名はボランティアで上演成功に協力する外郭集団

行政　財務　語学　マスコミ関係のスペシャリスト揃い

＊財務関係（予算案の見直し　補助金申請　協賛　賛助　広告）

＊企画関係（印刷　ケイト代表歓迎　表敬訪問）
＊運営関係（劇場との折衝　アルバイト　駐車場　レセプニスト）
＊マスコミ（テレビ放送新聞社）
＊庶務関係（起案文書作成発送　ホテル　交渉）
信頼関係を基に、自主自立自発・主体的に行動する
上演を成功させるために
クオリティの責任を負うオペラ協会と興行の成功を負う
上演実行委員会との役割分担は正解だった。
オペラ協会以外の方との交流、共同作業は新鮮だった。

10　アマチュア団体の財政事情

（1）入場料収入だけでは賄えない
当初２６００万円の予算原案を２１３５万円弱まで削った。入場料の予算に占める割合は、約6割である。SS席６０００円、S席５０００円、自由席４０００円設定。不足分は特別協賛社　協賛　広告　個人賛助会員等で賄う。財務委員会が中心になって奔走した。

（2）想定外の出費
台風シーズンに備え、保険契約（１９０，０００円）本番当日晴天「まさかのときの保険」であった。

（3）給付されなかった芸術文化振興基金助成金
独立行政法人日本芸術文化振興会のアマチュア等の文化団体活動助成金を得るため、県の文教文化課をとおし、「独立行政法人　日本芸術文化振興会理事長」宛に申請書。綿密なチェック。数回にわたる書き直しあり、
①文化振興基金助成金交付申請書
②活動の目的内容　予算書
③収支決算書
内定額は３６８，０００円～これまでの10分の1の査定
決算書提出後、内定取り消しの文書（黒字決算のため）
申請取り下げ文書の提出（始末書）を求められる
地方文化活性化のうたい文句は何だ？
文書作成の膨大な時間の浪費。作成の要領を勉強する必要ありと感じた。
赤字のない宮崎県オペラ協会を誇りに思う。

11　ケイト代表とイライザさんようこそ宮崎へ

（1）宮崎駅での盛大な歓迎式典
２０１８年８月22日（水）14：00～15：00上演実行委員会が企画し宮崎駅で盛大に歓迎式典を行った。ケイトさんとイライザさんは、広島から電車で宮崎入り。異例のことなので、駅の企画室の方と綿密な打ち合わせ。駅長さんはこの日のために赤絨毯を用意。会場設営はオペラ『赤毛のアン』の大きな立看板３枚。歓迎メッセージの横断幕（日高晃財務委員長作成）。カナダの国旗のファイルを持ったオペラ協会員と大宮小学校合唱団委員との大合唱。指揮は土田浩さん。ひな壇が用意され、見山委員長・地村会長の歓迎挨拶。山田成美委員の通訳で、ケイト代表のメッセージ。花束贈呈。国際的でなかなかユニークな歓迎式典になった。

（2）県立図書館～世界初演『赤毛のアン』記念企画展
ケイト・マグドナルド・バトラー氏歓迎セレモニー
２０１８年８月23日（木）10：15～11：40
宮崎県立図書館　２階研修ホール
県立図書館主催。特別展示室で『赤毛のアン』の本や絵本の展示。物語の舞台となったプリンス・エドワード島の紹介。ケイト代表が制作総指揮された映画の紹介やポスター展示・サイン会等で興味深いプログラムも用意。ここでも土田浩さん指揮で大宮小学校合唱団・

オペラ協会合唱。とても充実した歓迎セレモニーとなった。県立図書館のこのような大々的な企画展は珍しく、オペラ『赤毛のアン』公演の良い宣伝になった。しかも、新しい客層開拓にもなり、図書館に感謝したい。

12　第22回世界初演オペラ『赤毛のアン』公演

宮崎県オペラ協会創立45周年記念事業

２０１８年８月25日（土）26日（日）３公演

メディキット県民文化センター　演劇ホール

○開場前の長蛇の列　○満席

○３公演とも奇跡的に晴れ（台風シーズン中）

○開演を前に、ケイト代表のメッセージ（松本さんの通訳）

Ｌ・Ｍ・モンゴメリの相続人を代表して…

「赤毛のアン」は我々が初めて許可したオペラ作品です。祖母が存命でしたら感動の余り涙するに違いありません。娘のイライザとともに、今日ここにいることを大変嬉しく思います…

○完成度の高い舞台・キャストの熱演にケイト代表・イライザさん・観客がスタンディングオベイションで応えた。

○鳴り止まないカーテンコール（舞台上に、倉迫・佐橋・土田・地村・見山　勢揃い）

興奮はなかなか収まらなかった。

オペラ『赤毛のアン』舞台制作上演まで10年の歳月

２００８年の総会でオペラ化を決めて本日の公演まで10年。紆余曲折あったが舞台制作上演が実現した。個人的には70歳から80歳の10年間。人生の玄冬期渦中。「赤毛のアン」オペラ化という大きな目標をもらい、精神的に充実した日々をおくった。

ついにオペラ『赤毛のアン』の舞台実現

多くの素晴らしい人々に助けられた

光栄であった。

13　オペラ『赤毛のアン』社会的評価

○宮崎日々新聞社　文化賞

○オペラ専門誌「ハンナ」創刊号に高評価の評論記事

○モンゴメリ相続会社ケイト社長と長女イライザさん来宮

○宮崎市より初めての助成金100万円

○佐藤寿美館長の英断で県立劇場演劇ホール舞台無料提供

○宮崎駅・県立図書館における初めての公式歓迎式典

○広範囲の地域からお客様

○３公演とも満席

おわりに

～ＡＧＧＬＡより契約５年間の延長許可

宮崎県オペラ協会は、公演終了後契約の延長を願い出たケイト代表は帰国後、直ちにＡＧＧＬＡと協議の結果２０２０年３月３１日から２０２５年３月３１日まで契約延長を許可する

花いっぱいの　みやざきで　これまでも

これかれも

オペラのあるまち　感動のあるまち　みやざき

画像：宮崎県オペラ協会提供

ケイト代表・イザベラさん歓迎式典

河野知事表敬訪問

戸敷市長表敬訪問

赤毛のアン初日公演

赤毛のアン舞台

赤毛のアン舞台

赤毛のアン舞台

赤毛のアン舞台

赤毛のアン舞台

赤毛のアン舞台

オーケストラ・アンサンブル宮崎

県立図書館講座

画像：宮崎県オペラ協会提供

宮崎県立図書館長　中原　光晴

宮崎県文化講座研究紀要　第四十七輯

令和三年三月三十一日　発行

編集
刊行　宮崎県立図書館
〒八八〇―〇〇三二
宮崎市船塚三丁目二一〇番地一
電話〇九八五―二九―二九一一

印刷　㈱ヒダカ印刷
〒八八〇―〇八六二
宮崎市潮見町一三番地五
電話〇九八五―二八―四一一三

No.

（非売品）

©２０２１　宮崎県立図書館